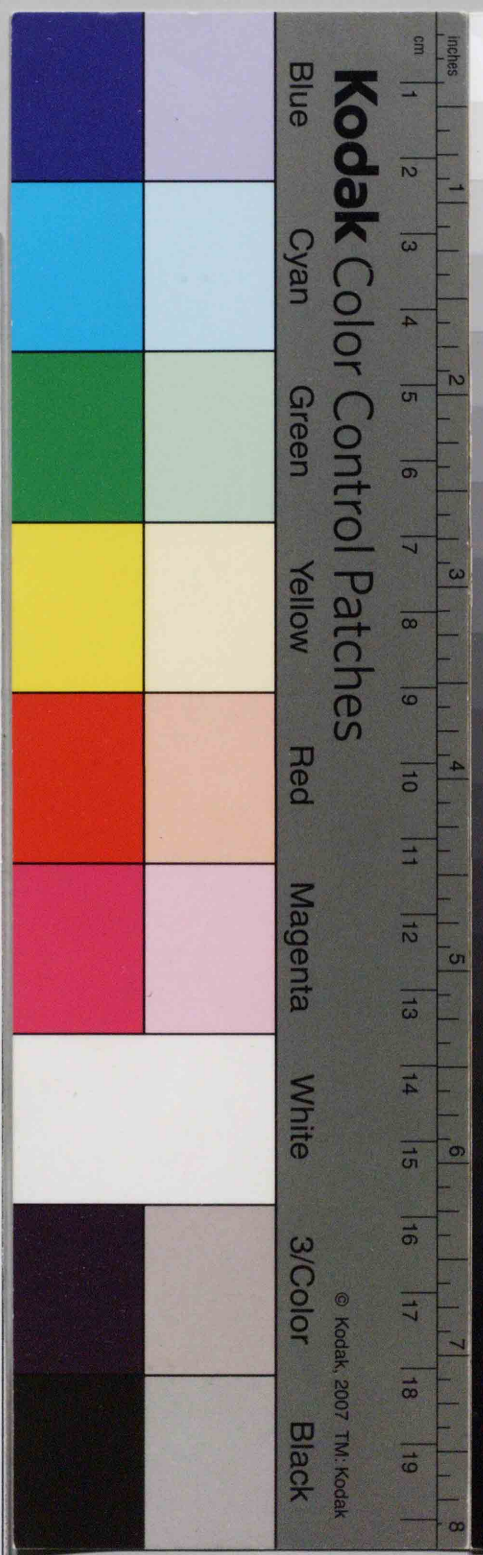


訂校
新撰國語讀本
卷八

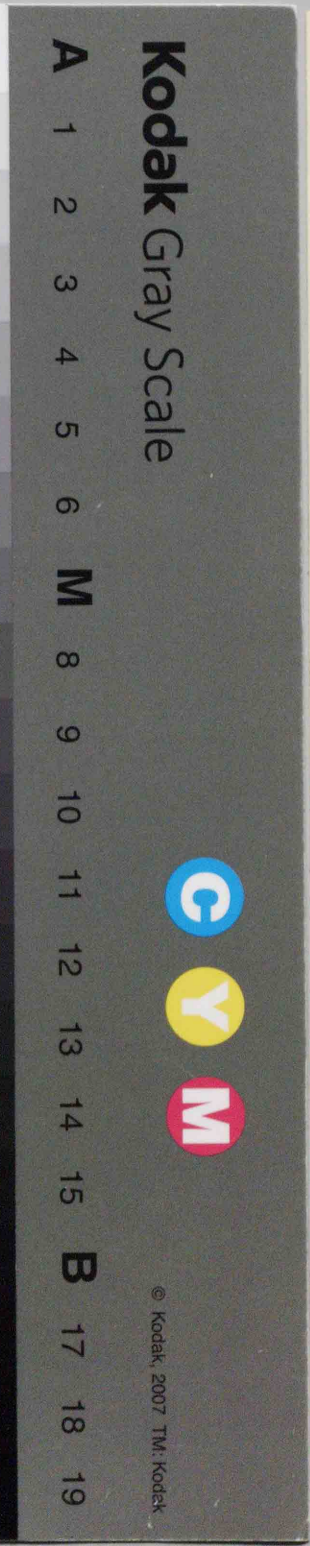
4a
810
大10



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

41512

教科書文庫

4
810
41-1921
20000 67667

資料室

日八月二十年十正大

濟定檢省部文

用科語國校學中

42
810
大10

文學博士佐々政一編

大町芳衛
武島彦郎
杉敏介
補修

訂校新撰國語讀本

株式會社明治書院



訂校新撰國語讀本卷八目次

- 一 述 懷……………一
- 二 秋の感想……………七
- 三 默想記……………一二
- 四 百蟲譜……………一九
- 五 古調新調……………二五
- 六 小品三章……………二八

目次

徒然草抄

三、時雨	
七 雨の興	三二
八 焚火 上	三六
九 焚火 下	四三
一〇 靈感 上	四九
一一 靈感 下	五四
一二 歌人西行 上	六一
一三 歌人西行 下	六七
一四 銀の猫	七三
一五 鎌倉三代	八二
一六 徒然草抄	九一

鎌倉三代

- 一、花と月
- 二、同じ心ならむ人
- 三、人のころ
- 四、折りふしの移りかはり

一七 おらが春	九九
一八 狂歌	一〇二
一九 米人の理想主義	一〇五
二〇 落花の雪	一一三
二一 會津落城 上	一一九
二二 會津落城 下	一二五
二三 關が原古戰場	一三〇

二四 羽衣……………一三四

卷八目次終

校訂新撰國語讀本卷八

一 述懷

おのれいときなかりしほどより、書をよむことをなむ、よ
ろづよりもおもしろく思ひてよみける。さるは、はかばかし
く師につきて、わざと學問すともあらず。何と心ざすこと
もなく、そのすぢと定めたるかたもなく、ただ、からの、やま
との、くさぐさのふみを、あるにまかせ、うるにまかせて、古き
近きをもいはず、何くれとよみけるほどに、十七八なりしほ

どより、歌よままほしく思ふ心いできてよみはじめけるを、
それはた師にしたがひてまなべるにもあらず、人に見する
ことなどもせず、ただひとりよみ出づるばかりなりき。集ど
もも、古き、近き、これかれと見て、かたのごとく今の世のよみ
さまなりき。

(二) 小津定利。
(三) 日本橋大傳馬町一丁目にある。
(四) 僧契沖の著、五卷より成る。
名はお勝。

かくて、はたちあまりなりしほど、學問しにとて、京になむ
のぼりける。さるは十一のとし、父ちちにおくれしにあはせて、江
戸江戸にありし家のなりはひをさへうしなひたりしほどにて、
母ははなりし人のおもむけにて、くすしのわざをならひ、またそ
のために、よのつねの儒學じゆがくをもせむとてなりけり。
さて京に在りしほどに、百人一首の改觀抄かいくわんせうを人にかりて

伊勢物語の記
しきしまのや
まと心を人と
は朝日に
ほふ山さくら
はな
宜長

見てはじめて契沖といひし人の説を知り、そのよにすぐれ
たるほどをもしりて、此の人のあらはしたる物、餘材抄勢語
臆斷おそなどをはじめ、其の外もつきつきにもとめ出でて見け

とよまゝのやまもむけ人
ゆりあゝほふ山さくら
はな

讀本 宜長 宣長

しきしまのや
まと心を人と
は朝日に
ほふ山さくら
はな
宜長

るほどに、すべて歌まなびのすぢのよきあしきけぢめをも、
やうやうにわかまへさととりつ。さるままに、今の世の歌よみ
の思へるむねは、大かた心になはず、其の歌のさまをか

しからずおほえけれど、そのかみ同じ心なる友はなかりければ、ただ世の人なみに、ここかしこの會などにも出てまじらひつつよみありきけり。さて人のよむふりはおのが心にはかなはざりけれども、おのがたててよむふりは、今の世のふりにもそむかねば、人はとがめずぞありける。そはさるべきことわりあり、別にいひてむ。

さて後、國にかへりたりしころ、江戸よりのほれりし人の、近きころ出でたりとて、冠辭考といふ物を見せたるに、ぞ、縣居の大人の御名をも初めて知りける。かくて其のふみはじめに一わたり見しには、更に思ひもかけぬ事のみにして、あまりこととほく、あやしきやうにおほえて、さらに信ずる心

賀茂直淵の著、十卷より成る。

見せしむる、見せしむる

たこ、一孤、用

はあらざりしかど、猶あるやうあるべしと思ひて、立ちかへり今一たび見れば、まれまれには、げにさもやとおほゆる。しぶしもいできければ、また立ちかへり見るに、愈げにとおほゆることおほくなりて、見るたびに信ずる心の出で來つ、つひにいにしへぶりのことばの、まことに然る事をさとりぬ。かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉のときごとは、なほいまだしきことのみぞ多かりける。おのが歌まなびのありしやう、大かたかくのごとくなりき。

さて又、道の學びは、まづはじめより、神書といふすぢの物、古き、近き、これやかれやとよみつるを、はたちばかりのほどより、わきて心ざしありしかど、とりたててわざとまなぶ事

降子

*田安宗武

はなかりしに、京にのぼりては、わざとも學ばむとこころざしはすすみぬるを、かの契沖が歌ぶみの説になずらへて、皇國のいにしへの意をおもふに、世に神道者といふもの説くおもむきは、みないたくたがへりとはやくさとりぬれば、師と頼むべき人もなかりしほどに、われいかで古のまことのむねをかむかへ出でむと思ふこころざし深かりしにあはせて、かの冠辭考を得て、かへすがへすよみあちはふほどに、いよいよ心ざしふかくなりつつ、此の大人をしたふ心、日にそへてせちなりしに、一年このうし田安の殿の仰ごとをうけ給はり給ひて、此の伊勢の國より、大和山城など、ここかしこと尋ねめぐられし事のありしをり、此の松阪の里にも

二日三日とどまり給へりしを、さることつゆしらで、後にききて、いみじくくちをしかりしを、かへるさまにも、また一夜やどり給へるを、うかがひまちて、いとうれしく、いそぎやどりにまうでて、初めて見え奉りたりき。さてつひに名簿を奉りて、教をうけ給はることにはなりたりきかし。

(本居宣長)

二 秋の感想

愈、秋のさ中になつて來た。春、眞先に芽生した櫻や柳の葉は既に地に委して、林を成せる武藏野の櫛は高く大空に沖してゐる。武藏野の空は、此の頃は毎日のやうに降續いて、人

(=) Hugh Miller. (←) Baluch Spinoza.
(1802-1856) (1932-1677)

英國の地質
學者。
和蘭の哲學
者。

はただ空を眺めては氣候の悪いことを啣つて居る。
私どものやうに、學校へ行つて歸つてからは書齋に閉ぢ
こもり、明けては復、學校へ行くといふ單調な生活をして居
る者も、斯ういふ時節に際會しては、考へることが無いでも
ない。時たまには、斯くの如き生活に對して一の捉はれた心
地を感じずには居られないこともある。併し再び考へる。捉
はれたる生活と、さうでない生活とは、要するに主觀的な見
方の相違に過ぎない。境遇に支配されなかつた人人は、過去
において確にあり得た。スピノザは何うであつたか。又、ヒュ
ーミラーは石工でありながら、大なる作物を遺したてはな
いか。彼等は、生活の如何なる状態をも彼等自身の人格に統

一し適用することを知り、それによつて毫も自身を攪亂さ
るることを許さなかつた。

雨の書齋に閉ぢこもつて、美はしい秋を見す見す臺なし
に送らねばならぬ悲痛を感じてゐると、私は北國の十月に
想を馳せずには居られない。北國の九月と十月とは、一年中
で最も氣候のよい時である。稻刈のために次第次第に擴が
つて行く心地のする田圃、野末に屹立する立山一帯の連峯
の眞白に輝き出す其のきびきびしさ、ところどころ畑中に
催さるる豆焼の煙、朝霜を帯びたる蕎麥の花、淡い煙の立つ
て居る小川の面へ、榛の黄葉の閒を震ひつつ裂落ちる朝の
太陽の黄金色、朝まだ暗い閒の栗拾などは、私の一生を通じ

て忘れることの出来ない記憶である。

併し其等にも亦いふに言はれぬ寂しきがある。眞白な峯の姿には、壯嚴の趣の外に一種の寂しい凄味がある。稻刈の唄の聲には、沈鬱を包む節ころがしがある。榛の黄葉の閒を裂けつつ震ひつつ落ちて来る朝の太陽の光には、微動する神経の惱がこもつて居る。小川の囁には、うら悲しい金の響のやうな惱が潜んで居る。此等の情緒が、知らず識らずの閒に、北國人の性格の内に溶けて入つて居る。

北國の秋は、飽くまで抒情詩的な響に充ちて居る。暗示的な力と豫言的な氣分とを仄めかして居る。故に病葉の微動にも象徴的な轟があり、動かぬ空氣の中にも無言の融會が

行はれ、統合の音楽が奏せられて居る。

十月の朝な朝な、蕎麥の花の白い畑を分けて、さらさらと音立てて流れる小川の橋を渡つて行く、學校の通ひ路の印象的な眺は、春夏と異なつた、一種神祕的な想に私どもを力強く誘はずには止まない力を持つて居る。

又、私は嘗て自然の閒に放浪した時分に訪れた、十月の荒川や笛吹川や千曲川や鬼怒川などの上流の黄葉を想ひ起さずには居られない。又、若葉の美を見たことのある黒部川や高瀬川や上高地の紅葉を想像せずには居られない。そして落ちて行かうとする閒際に、最後の緊張を見せようとする木の葉の顯示に、男性的な美の表現を感じずには居られ

ない。かの晴れたる秋の落日の、何と此の紅葉と共鳴する情調に富めることであらう。吾等の此の自然に對する時の心持の、何としつくりと、自分が自分と一致してゐると云ふ感じを、強く且つ寂しく覺えることであらう。

私どもは、いつも十月と云ふ聲を聞く毎に、一つの悲壯な力の暗示を感ずる。生活の上に於て一種の犠牲と融合との心地よき情調を想像して、自分はただ再び詩人に還つたかのやうな心地に動くのである。(田部重治―渾沌より統一へ)

三 默想記

理想・信念のあるところ、一切の物その身方となり、その臣

僕となり、その實現・發展の一形式・一器具となる。理想・信念のあるところ、神の鞭は慈恩の鞭となり、その軛は溫和なる軛となる。

人生の最慘事と稱せらるる戦争だに、理想・信念を以て戦へば、一種崇高なる光彩を著け來る。ここに於てか、猛き武士の心にも惶として驕らざる敬虔の念あり、鋭き劍戟の影にも優にやさしき温情あり。瀑は巖の中に自家の意志を實現す。理想・信念は實に戦争てふ恐るべき出來事の中にだに、自家の偉大を實現・發展せずんば已まざるなり。戦若し實に已むべからざるものならば、戦をして權威あらしめよ。何物か戦をして權威あらしむる。曰く理想のみ、信念のみ、大いなる

理想・信念のあるところ、戦争そのものが一箇の詩的・宗教的・人道的感情の發現形式となるにあらざや。

何物か頑然としてその大同化力・大實現力に抗衡し得べき。見よ、死も亦その敵にあらざ。彼の日露の戦に於ける我が金州丸の將士の花の如き最期振は、これ彼等が少なくとも自己の職分に對し、君國に對する理想・信念の熱き感情に燃えたるが故にあらざや。理想・信念は、慘澹たる死をも優に美しう同化して、その實現の具たらしむ。何物かよくその烈烈たる發展力の矢面に立ち得べき。

* Mahomet.
(570? - 632)
即 回教の開

神は曾て單調・無趣味なる亞刺比亞の曠野にマホメットの魂を蒔きぬ。而して見よ、この眇たる自然兒に宿れる芥種

ほどの理想と信念とは、沈沈として聲なく、飽くまで曠野の砂と雲と星とを攝取同化して、竟に世界の精神界に於ける參天の一巨木と發展せしにあらざや。神はまた曾て古の猶太國民を流離・放竄・饑餓・疾疫・俘虜・奴隸・亡國等のあらゆる残酷なる状態の中に置きぬ。されど猶太國民独自の理想と信念とは、巖間に肥えゆく水の流の如く、これら一切の難關の事情の下に、いや益・清冽の光を増し、奔放の勢を盪して、擴充發展の極、遂に耶蘇基督の人格と事業とを現出せしにあらざや。

世界に一の言葉あり、道あり、理想・信念の種子あり、其の驚くべき大實現力は、この偶然・無意義なる原子相尅の大塊に

智慧を附し、秩序を與へ、目的を布いて、森然たる自然萬有ここに成りぬ。理想・信念の白熱するところ、利害損得も、善惡美醜も、物質も原子も、自然も人も、否、神そのものも、その撓揉意の如くなる形造力に従はずといふことなし。人は因果・宿命をつれなしといふ。されど大いなる理想・信念の前には、因果・宿命も寧ろ圓滿なる神的秩序として、歎美・崇敬せらるるならずや。風吹き浪巻く何の意義かある。されどなほ詩人の高く歌ふを聴け。

理想・信念のあるところ、無心の風浪も亦その身方となり、力となる。仁者にして山に寄託の悦を深うし、智者にして水に觀賞の味を永うす。されば諺に、枯木も三年拜めば花次く

といへり。枯木おのづから花咲くにあらず、信ずる者の念力

これに入りて妙法の花を咲かしむるなり、誰か之を主觀の

迷といふ。

げにや我等が歴史といひ文明といふもの、亦これ我等が

理想・信念の客觀の形を取りて摩訶妙法の花と咲きたるも

のにあらずや。文明史の營は、人類がその理想・信念を客觀界

に實現しゆく夢幻ならぬ大いなる實在なり。何物かその超

絶的大發展力を遮蔽し得べき。一切の物皆來つてその發展

圈内の一形式・一要素とならずんば已まざるなり。科學とい

ひ哲學といひ、これ亦我等が理想・信念をもて曾て無意義、没

交渉なりし自然と人生とを翻譯・征服せる實現の史を語る

三 歌想記

白己ノ権カニオヤタ。一七

ものに外ならず

世の悲哀に泣き、逆境に悩めるものよ、理想・信念だにあら

ば、悲哀・逆境はわが身方なり、友なり、恩寵なり、所詮神の答は

堪へがたき無慈悲のものにあらず、そこに深き智慧あり、仁

愛あり、一切の不幸・害悪は理想・信念によりて征服せられむ

がためにあり、病苦なほ我等が謙遜・虚心・忍耐・従順・忠恕・克己

献身・平和・歸依を學ぶ無上の學校にあらざるか。涙なき世に

は歡もなかるべし。理想・信念ある者は苦き涙を祝福の涙と

す。嗚呼、誰か真に能く上天の攝理の心を啓くものぞ。大いな

る理想・信念の鍵を有てる者ぞ其の人なる。

何れの時か大いなる理想・信念の要なからむ。而してすの

時は更に痛切に、我等が箇人として國民として、雄大・深奥な
る理想・信念を要する時にはあらざるか。(網島梁川一病問錄)

四 百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限なるべし。それも

啼く音を愛づるものならねば、籠に苦しむ身ならぬこそな

ほめてたけれ。さてこそ、莊周が夢もこの物には託しけぬ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたる

こそ幸なれ。臘月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池

に飛んで翁の目覺したれば、このものの事、更にも誇り難し。

蟬はただ五月晴に聞きそめたるほどがよきなり。やや日

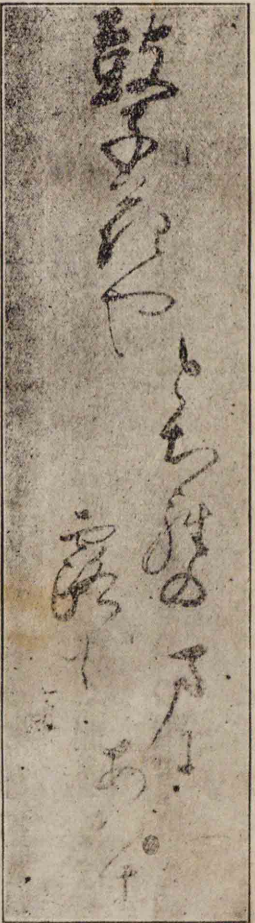
昔者莊周夢爲蝶、栩栩然胡蝶也。俄然覺、則遽遽然周也。不知周之夢爲胡蝶、胡蝶之夢爲周歟。(莊子) 花になく、露、水にすむ蛙の聲をきけば、生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける。(古今集序) 松尾芭蕉。

鼓子花やとち
しの露もまに
あはす 也有

鼓子花

(一)
やがて死ぬけし
きは見えす、蟬
の聲。(松尾芭蕉)

(三)
風恭勤不_レ倦、博
學多通、家貧不_レ
常得_レ油、夏月則
練蠶盛、數十登



鼓子花 有也并横

ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しほる心地す。されば初蝶
とも、初蛙ともいふ事をきかず。この者ばかり初蟬といはる
るこそ大いなる手柄なれ。やがて死ぬけしきは見えすと、こ
のものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛び
かひ、草にすだく。五月の闇は只このもののためにやとまで
ぞ覺ゆる。然るに貧の學者にとられて、油火の代りにせられ

火、以照_レ書、以
夜繼_レ日焉。(晉
書、車胤傳)

(三)
楚國魏舍(漢哀
帝の時の人)初
贈_二楚王_一朝、宿_二
未央宮。見_二蜘蛛
大如_二栗、四面
張_二羅網_一、有_レ蟲
觸_レ之而死。舍乃
歎曰、吾生亦如
此耳、仕官者人
之羅網也、豈可_レ
淹_レ歲。於是挂_レ
冠而退。時人謂_レ
之爲_二蜘蛛之隱_一。
(金樓子)

たるは、この者の本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませ
ざるは殊の外の不自由なり。俳諧にはこの真似すべからず。
日ぐらしは多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎ
て、夕は草に露おく頃ならむ。つくつくぼうしといふ蟬は、つ
くし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死してこのものに
なりたりと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶ
にも劣るべからず。

蜘蛛はたくみに網を結んで、ひそまつて物を害せむとす。
もろこしのむかしには、退隱の媒ともなりたれど、ひとへに
奸賊の心ありていとにくし。古代、朝敵の初として、頼光をさ
へおびやかしたるいとおそろし。さはいへ廢宅の荒れたる

かひかひ
甲斐
甲斐

(二) 淳子琴、醉夢入二
大槐安(一見)
王。王曰、吾南柯
郡、屈、卿爲守。
居凡廿載。使者
送出穴、遂寤。
導三古槐下蟻穴、
洞然明朗、乃槐
安國。又一穴直
上三古枝、即南柯
郡也。異聞集。
(三) 千丈之隄以三蟻
蟻之穴(一)蟻
非子)

軒の蟬の羽などかけ捨てたるは、いささかあはれ添ふる折
もあらむか。彼はかひがひしく巢作りてこそあれ、東海道に
ちりほひたる宿なし者をば、くもとはいかていふやらむ。
蠶の生涯は世の爲に終り、火とり蟲はたがために身をこ
がすや。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は不物ず
きの誇となれり。おなじ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、
こがね蟲はいやし。
蟻は明暮にいそがしく、世の營に隙なき人には似たり。東
西に聚散し餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、
その身の安き事を得む。さるもたよりあしきかたに穴を營
みて、千丈の隄を崩すべからず。

長嘯子

(三) 憎者蟻一賦あり。
(四) 備紙魚一詞あり。
木下廣俊
(五) 欲以三蟻 螂之
斧一擊。陸車之
陸。文選。
(六) 駿河國駿東郡。
(七) 同國富士郡。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒
に噛まるる虱はたまににして、猿の手にさぐらるる虱は
迷るること難かるべし。
蝸牛は只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。家
もちたれども、行く先先をおひ歩くは、雲水の安きにも似ず。
蛇蚯蚓の足なくとも歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多きは
不用の事なり。
蟪蛄の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつな
り。人の上にもこのたぐひはあるべし。
蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。ただ原吉原を駕に
のりて富士を眺めゆく人には似たり。

秋風にほころび
 づりさせてふき
 りぎりすなく。
 (古今集、在原棟
 梁)
 (三) 藤原直子
 根みじ。(古今集)
 なかめ、世をば
 らと、音をこそ
 すむ蟲の村に
 おまの刈る藻に
 (三) 藤原直子
 藤原直子：八月は
 かりになれば、
 父と父よとはか
 なげに鳴く、い
 みじくあはれな
 り。(枕草子)

促織・鈴蟲・響蟲はその音の似たるを以て名によばる松蟲
 のその木にもよらていかでかく名を附けたるならむ。毛生
 ひむくつけき蟲にもおなじ名ありて、松を枯し、人にうとま
 る。一つ在處に二人の八兵衛ありて、ひとり後生をねがひ、
 ひとり殺生を事とす、これ松蟲のたぐひなるべし。
 きりぎりすのつづりさせとは、人の爲に夜寒を教へ、藻に
 棲む蟲は、われからとただ身の上を歎くらむを、養蟲のちち
 よと呼ぶは、母をば慕はて、など父をのみ戀ふらむとあやし
 蚊は憎むべき限ながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき
 夕、はじめてほのかに聞きたらむ、又は長月の頃、力なく残り
 たるは、寂しきかたもあり、蚊帳釣りたる家めさま、蚊遣焚く

(四) 香伴、藤字叔夜、
 有奇才、長好三
 老莊、所興交、
 者唯阮籍、山濤、
 預其流、一者、向
 秀、劉伶、阮咸、
 王戎、爲竹林之
 遊。世所謂竹林
 七賢也。(蒙求)

(五) 貞門の祖。(三三三)
 (六) 貞門の祖。(三三三)
 (七) 貞門の祖。(三三三)
 (八) 貞門の祖。(三三三)
 (九) 貞門の祖。(三三三)
 (一〇) 貞門の祖。(三三三)
 以下八句は元稹
 の蕉風調。

里の烟など、かつは風雅の道具ともなれり、藪蚊は殊にはげ
 しきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。
 (横井也有一稿衣)

五 古調新調

元朝や、神代のこともおもはるる。 荒木田守武
 笠を著ば、雨にも出でてよ、夜半の月。 山崎宗鑑
 冬籠り、蟲けらまでもあなかしこ。 松永貞徳
 お靜に御座れ、夕陽いまだ残んの雪。 西山宗因
 青麥や、雲雀があがる、あれ、さがる。 上島鬼貫
 名月や、疊の上に松の影。 榎本其角

夜も既に明て
水鶏の行宿哉
其角

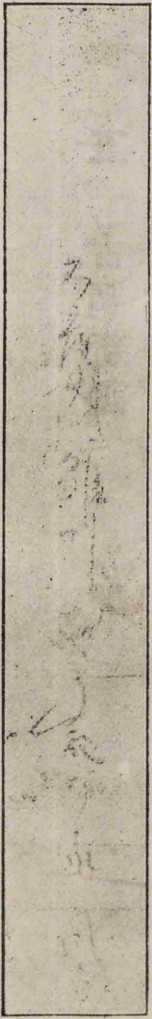
不産女の誰か
しつくそ命な
る 嵐雪



蹟証角其本原

黄菊白菊、その外の名はなくもがな。
岩端や、ここにもひとり月の客。
牛叱る聲に鳴たつゆふべかな。

服部 嵐雪
向井 去來
各務 支考



蹟証嵐雪服部

長松が親の名で来る御慶かな。
鶯や、下駄の齒につく小田の土。
卯の花に蘆毛の駒の夜明かな。

志田 野坡
春花園 凡兆
森川 許六

(一) 以下七句は天明
前後の調。

(二) 秋來ぬと目には
さやかに見えね
ども、風の香に
ぞ驚かれぬる。
(古今集、藤原敏
行)
以下文化文政前
後の調。

歛さげて叱りに出るや、桃の花。
山路来て向ふ城下や、風の數。
馬借りて、かはるがはるに霞みけり。
曉や、鯨の吼ゆる霜の海。
霧深し、何呼ばりあふ岡と舟。
美しや、春は白魚かいわり菜。
枯葦の日に日に折れて流れけり。
秋來ぬと目にさや豆のふとりかな。
足輕のかたまつて行く寒さかな。
東海道残らず梅となりけり。
名月や、江戸のやつらが何知つて。

岩田 涼菟
炭 太祇
大島 蓼太
加藤 曉臺
高井 几童
加舍 白雄
高桑 闌更
大伴 大江丸
井上 士朗
夏目 成美
小林 一茶

六 小品三章

一、^{午後十時}夜學

寺寺の初夜の鐘のひびきもをさまりて、皆人も寝たるに
 いとうれしう、燈火あかくしなして文机に打向ひたる、いみ
 じう心すみで、晝見たりしあたりの、何ごころなくて過ぎに
 しも思ひしられて、深き心はへあるくだりくだりもおのづ
 から解き得らるか。かかげつくしてもなほねぶたさも知
 らず、油さし添へつつ見もてゆくに、遠き世の人もたださし
 むかひ語らふ心地す。さうしつくりて、をかしきふしふし、あ
 るは、ふと思ひ得たることなどをば、墨おしすりつつ書きつ

いとといとと

けなどするもをかし、とりのこゑは夜深きにやと思ふに、い
 ととく明けはなれたるし、ばしとて打ちねぶる夢のうちも
 あだしごとならむやは。(中島廣足)

二、 蟲の音

家なみしきたる都のすまひは前裁もほどなけれど、萩す
 すきなどはさすがにをりしりがほなるを、あはれと見わた
 るゆふつかたに親しき人のもとより、昨日嵯峨野にもとめ
 しなりとて、蟲どもあまた籠に入れておこせたり、めづらか
 にて、とくわらはよびてはなたせつつ、なほながめをるにも
 とよりのにやあらむ、いままゐりのにやあらむ、かつが鳴
 きいてたる、いと興あり、月さしのほりては、まして音もすみ

ゆくにはるけき野へまでおもひやられて。(石川依平)

三、時雨

神無月のはじめ、物へゆきけるに、日いと短きころや、遠き處ほろろにたしありければ、いそぎつれど、かへさは暮れにけり。

夕月の影に玉笹の霜のところせくおき渡したるが、きら

きらと見えたるなど、なかなかをかしき冬枯の野邊の景色、聞きならましかば口惜くちしからましと思ふにも、入りがた近く

かすかなる光のいと飽かぬ心地するに、空さへ俄に曇りて、山の端まへならて月もかくれ、いみじく暗くなりて、風あらあら

しく吹きぬるは、げに定めなき此の頃の空のけしきかなと見るには、したなく打ちしぐれ來ぬれば、足を空に走りかへ

るほどしとどに濡れぬ。

なにとは分かねど、いと大きなる木の立てるを見つけて、しばしのやどりと頼むかけさへいたく散りすぎにたれば、

雨たまるべくもあらぬぞいとわりなきわざなりける。しばしのほどに、なごりもなく霽れぬれど、月ははやく入りにけり。(本居宣長)

七 雨の興

春は雨こそ長閑なれ。軒端より霞み渡りて、いとこまやかに降れるが、衣濕せども降るとは見えす、軒の玉水も閒遠に音して、棲みすてし蜘蛛のいに玉ぬく氣色も、庭の面の枯生

夫
 いかせに
 さめりふ
 野辺のみ
 色も
 あも
 かけし
 にもぬけ

の牀に緑やや添へゆくも、柳の絲の動きもやらで露そふも、
 ともにいと長閑なり。燈挑げても、何となく光しめりたるに、
 鐘の音のほのかに響き來るも、心すみ渡りぬるものぞかし。
 そのほか梅が香のしめり、夜深く匂ひわたるも、花に憂しと
 かこちぬるも、あはれはありけり。
 春も老いゆく頃、蛙の時得顔に鳴くもをかし。時鳥の初音
 いかにと思ふ頃、村雨のはらはらと降出てたるも五月雨の
 幾日もふりくらしして、書の卷巻くり返しつ居たるは何と
 なく世の中の事にも遠ざかりぬる心地ぞする。
 また、暑さに堪へかぬる頃、雲の漲り出づる勢ありて、風ひ
 としきり吹落ちたるに、柳蓮などの葉裏白く見せたるも涼

しやがて、大きやかなる雨の閑遠に落ちたるが、後には頻に
 降りきて、物音も聞えず、土のほひ來るもいと心地よし。軒
 端は玉の簾かけたらむやうに玉水の絶間なく落ちたるに、
 庭は一つ湖となりて、あるは瀧おとし、又は水はしらせたる
 に、人人しばしものいはで、打ちまもりゐたるもをかし。やや
 雲薄くなれば、池の面には、數ふるばかりの雨見えて、小鳥な
 ど庭へ躍り出でて、餌ひろふ様もをかし。はじめ、雲の立出て
 し方は、はや、空の一しほ緑に晴れて、虹なども立てるに、木木
 の緑の庭、涼は影見ゆるもいと涼し。老いたる女など、かみの
 音に驚きてはひ出でたるが、今日のは、わかかりし時のごと
 くと、霽れにけり。今時のは、かく霽ること稀なり。などはや

繰言トシトシいふもあり。彼はかくあわてし。などいひて、かたみに笑
 ひとよみつつトシトシけふは、蚊も少なかるべし。かみの音もいとか
 すかなり。此のごろの暑さも忘れぬ。とて、端ちかう出づれば、
 夕月の光さしわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれた
 る蛙の物待顔何の物待に空うちならみて、ぶつつかなる音に鳴くも
 をかし。

秋來る頃の雨は、きのふにかはりて何となう淋し。萩の上
 風、外山の鹿の音など、月よりも身にしむ心地ぞする。常に聞
 馴れし、笈の水の音までも、あはれ深くこそ。月の前の村雨も
 またをかし。まいて、やや夜寒の頃、鳴きからしたる蟲の音の、
 雨のをやみに幽かなる聲して枕近く鳴きよるもあはれな

夜対

り。この雨の木木をそめなむと思へば、葺なども生ひいてな
 む。栗もはや落つべし。など、童のもの淋しげに、燈火に向ひつ
 つ言ひいづるも、げに様様なり。夜深き鐘の音のうちしめる
 ものから、さすがに秋は聲近えて聞ゆるに、鐘つく人の心を
 もあはれと思ふばかり、感情はいと深かりけり。紅葉の匂深
 きも、白菊のうつりゆきて、ひとさかり見するも、尾花の露重
 げはうちしをれたるに、龍膽のうらみ深く咲きたるも、いと
 つきづきし、朝顔のみな枯れたる中に、ささやかに赤う咲出
 てたるが、晝過ぐるまでも、萎みかくれたる、またあはれなり。
 野分の風はおどろおどろしきものから、雨は夕立に、おとら
 ざれど、さすがにあはれをそふるは、秋の習なるべし。時雨の

さと音して、夕日に白く降りくるも、また音かへて枕とふも
をかし。(松平樂翁一花月草紙)

八 焚き火上

北風を背はなし、枯草白き砂山の崖に腰かけ、足なげだし
て、伊豆連山の彼方に沈む夕日の薄き光を見送りつつ、沖よ
り歸る父の舟遅しと待つ、逗子邊の童の心、その淋しさ、うら
悲しさは如何あるべき。御最後川の岸邊に茂る葦の枯れて、
吹く潮風に騒ぐ其の根がたには、夜半の満潮に人知れず結
びし氷、朝の退汐に破られて残り、ひねもす解けもせず、夕闇
に白き線を水際に引く。若し旅人、疲れし足を此の濤に停め

逗子と葉山との
間にあり。

御最後川の左岸
にあり。平維盛
の子、六代御前
ここに斬らる。

しとき、何心なく見廻して、何等の感もなく行過ぎ得べきか。
見返れば、彼處なるは哀を今も七百年の後にひく六代御前
の杜なり。木がらし其の梢に鳴りつ。
落葉を浮べてゆるやかに流るる此の沼川を漕ぎのぼる
舟、知らず何れの時か、心地よき追分の節おもしろく此の舟
より響き渡りて、霜夜の前ぶれをかなしつる。あらず、あらず、
ただ見る何時も何時も、もの言はぬ、笑はざる、歌はざる男の、
農夫とも漁人とも見分け難きが、淋しげに艫をあやつるあ
るのみ。
歎かたげし農夫の影の、橋と共に臈に此の水に映る。かの
舟、音もなくこれをかき亂しゆく。見る間に舟は葦がくれ去

三二 運子と御最後川との間にあり。

るなり。

日影なほあぶずりの端にたゆたふ頃、川口の淺瀬を村の若者二人はだか馬に跨がりて靜に行き、晝めきたるを見ることもあり。かかる時、濱には見渡すかぎり人らしきもの影なく、引上げし舟の舳に止まれる鳥の聲をも立てて、翼打もの憂げに鎌倉の方さして飛びゆく。

或年の十一月末

方

年は迫れども、童は何時も氣樂なる

風の子、十三歳を頭に九つまで位が七八人、砂山の麓に集まりて何事をか評議まぢまぢ、立てるもあり、砂に肱を埋めて、頬杖つけるもあり、坐れるもあり。此の時、日は西に入りぬ。評議の事定まりけむ、童等は思ひ思ひに波打際を驅けめ

三三 相模國三浦郡田越村にあり。

ぐり始めぬ。入江の端より端へと、おのがじし見るが間に分れ散れり。潮遠く引きさりしあとに残るは朽ちたる板、縁缺けたる椀、竹の片、木の片、柄の折れし柄杓などの色色、皆一昨日の夜の荒れの名残なるべし。童等は一一此等を拾ひあつめぬ。集めて之を水際を去る程よき處、乾ける砂原を選びて積みたり。積みし物は悉く濡ひ居たり。

此の寒き夕まぐれ、童等は何事を始めたるぞ、日の西に入りてより程經たり。箱根・足柄の下を包むと見えし雲は黄金色にそまりぬ。小坪の浦に歸る漁船の風落ちて陸近ければ、や、帆を下し漕ぎゆくもあり。

ガラス碎け失せし鏡の額縁めきたるを拾ひて、これを焼

くは惜しき心地す。といふ兒の丸顔、色黒けれど、愛らし。されど其は必ず能く燃ゆ。と此の羣の年かさなる子、己が力に餘る程の太き丸太を置きつつ言へり。其の丸太は燃えじ。と丸顔の子いふ。いな燃やさて置くべき。と年上の子いきまきて立ちぬ。傍に一人、今日は獲物の何時になく多き様なり。と喜ばしげに叫びぬ。

童等の願は此等の獲物を燃やさむ事なり。赤き焰は彼等の狂喜なり。走りて之を躍り越えむことは互の誇なり。されば彼等はこのたびは砂山の彼方より枯草の類を集め來りぬ。年上の子先に立ちて此等に火をうつせば、童等は丸く火を取りまきて立ち、竹の節の裂くる音を今か今かと待てり。

されど燃ゆるは枯草のみ、燃えては消えぬ。煙のみ徒にたち昇りて、木にも竹にも火は容易く燃えつかず。鏡の枠は僅に焦げ丸太の端よりは怪しげなる音して湯氣を吹けり。童等は交る交る砂に頭押しつけ、口を尖らして吹けど生憎に煙眼に入りて、皆の顔は泣きたらむ如し。

沖ははや暗うなれり、江の島の影も見わけ難くなりぬ。干潟を鳴きつれて飛ぶ千鳥の聲のみ聞えて、彼方此方もの淋しく、其の姿見えすと見れば、夕闇に白きものはそれなり。あわただしく飛びゆくは鳴か、の葦間よりや立ちけむ。此の時一人の童、忽ち叫びていひけるは、見よや見よや、伊豆の山の火は、や見えそめたり。如何なれば我等が火は燃えざるぞ。と。

童等は齊しく立上りて沖の方を打ちまもりぬ打つてげに相模灣を隔てて、一點二點の火、鬼火かと怪しまるるばかり明滅し、動搖せり。これ正しく伊豆の山人、野火を放ちたるなり。冬の旅人の日暮れて途遠きを思ふ時、遙に望みて泣くは實に此の火なり。

「伊豆の山燃ゆ、伊豆の山燃ゆ」と童等は節面白く唄ひ、沖の方のみ見やりて、手を拍ち躍り狂へり。あはれ、此の罪なき聲、たそがれ時の淋しき濱に響き渡りぬ。私語く如き波音、入江の南の端より白き線立てて走り來り、これに和したり。潮は満ちそめぬ。

「此の寒き日暮に何時までか濱に遊ぶぞ」と呼ぶ聲、砂山の

彼方より聞ゆ。されど、童等の心は伊豆の火の方にのみ馳せて、此の聲を聞く者なかりき。歸らずや、歸らずや」と二聲三聲引續きて聞えけるに、一人の幼き兒、聞きつけて、「母呼び給へり、最早打捨て歸らむ」と言ひ、忽ち彼方に走りゆけば、残りの童等、又「さなりさなり」と叫びつつ、競うて砂山を驅上りぬ。

九 焚き火下

火の燃えつかざるを口惜しく思ひ、かの年かさなる童のみは、後振りかへりつつ馳せゆきけるが、砂山の頂に立ちて、將に彼方に走り下らむとする時、今ひとたび振向きぬ。ちらと眼を射たるは火なり。こは如何に、われらの火燃えつきぬ。

と叫べば、童等驚き怪しみ、たち返りて砂山の頂に集まり、一列に並びて此方を見下せり。

げに今まで燃えつかざりし木屑の風に誘はれて忽ち火

を起し、濃き煙うづまき上り、紅の焰の舌見えつ隠れつす。竹

の節の裂くる音聞え、火の粉まひ立ちぬ。火は正しく燃えつ

きたり。されど童等は最早この火に還ることをせず、ただ喜

ばしげに手を拍ち高く歡聲を放ちて、一齊に砂山の麓なる

家路に急ぎつ。

今は海暮れ濱も暮れぬ。冬の淋しき夜となりぬ。此の淋し

き返子の濱に主なき火はさびしく燃えたり。

忽ち見る、水際をたどりて火の方へと近ぎき來る黒き影

あり。こは年老いたる旅人なり。彼は今しも御最後川を渡り

て濱に出で、濱傳ひに小坪街道へと志したるなり。火を目が

けて小走りに歩む、其の足音重し。

噎れし聲にて、「よき火や」と幽かに叫びつ。杖なげ捨てて、

そがしく脊の小包をおろし、兩の手を先づ焰の上にかざせ

り、其の手は震ひ、其の膝はわななきたり。げに寒き夜かな」と

言ふ齒の根も合はぬが如し。焰は赤く、其の顔を照せり。皺の

深さよ眼いたく凹み、其の光は濁りて鈍し。額髪も髻も胡麻

白にて塵にまみれ、鼻の先のみ赤く、頬は土色せり。あはれい

づこの誰ぞや、さしてゆくさきは何處ぞ。行方さだめぬ旅な

るかも。

げに寒き夜かな。獨りごちし時、總身は心ありげに震ひぬ。
カハリテ言フコトハ
 斯くてやや煖まりし掌もて、心地よげに顔を摩りつ。いたく
心アリ
 古びて、所所古綿の現れたる衣の、火に近き裾のあたりより
摩リツケル
 湯氣を放つは、朝の雨に霑ひて、なほ乾すことだに得ざりし
ウレオ
 なるべし。

「あな心地よき火や」と言ひつつ、投げやりし杖を拾ひて、こ
 れを力に片足を揚げ、火の上にかざせり。脚絆も足袋も、紺の
ウスクナシキチヤ
 色あせたり。血色なき小指現れぬ。一聲高く竹の裂くる音し
ケイロ
 て、勢よく燃上れる焰は、足を焦さむとす。されど翁は足を引
ヤク程テアル
 かざりき。

げに心地よき火や、誰が燃やしつる火ぞ、忝し。言ひさして

足を替へつ。十とせの昔、樂しき爐見捨てつるよりこのかた、
十
 未だこの様なるうれしき火に遇はざりき。といひつつ、火の
目フキハ
 奥を見つむる目なさは、遠きものを眺むるが如し。火の奥
ズートクネウチ
 には過ぎし昔の爐の火、昔のままに描かれやしつらむ。鮮か
カカリテアツカモカレシイハフキ
 に現るるものは、兒にや孫にや。昔の火は樂しく、今の火は悲
イヤンチキハ
 し。あらず、あらず。昔は昔、今は今。心地よき此の火や。いふ聲は
ハナイソシテフコト
 震へたり。荒荒しく杖を投げやりつ。火を脊になし、沖の方を
イソクイテ
 前にして立ち、體をそらせ、兩の拳もて腰をたたきつ。仰ぎ見
カレシイコト
 る大空、晴れに晴れて、黒ずみ、星河は霜をつつみて、遠く伊豆
岬ノサギ
 の岬角に垂れたり。
タノ川
霜ヲ降ラセ
カクスマニ渡ラセ
カクスマニ渡ラセ
カクスマニ渡ラセ

身も煖かくなりゆき、ひぢたる衣の裾も袖も乾きぬ。ああ、

此の火、誰が燃やしつゝる火ぞ。誰が爲にとて、誰が燃やしつゝるぞ。今や翁の心は感謝の情にみたされたり。老の眼は涙ぐみたり。風なく波なく、さし来る汐のしみじみと砂を浸す音を翁は眼とちて聴きぬ。さすらふ旅の憂も此の刹那にや忘れはてけむ。

あはれ此の火、やうやうに消えなむとす。竹も燃盡き、板も燃盡きぬ。かの太き丸太のみは、猶よく燃えたり。されど翁は最早これを惜しとも思はざりき。ただ立去り際に名残惜しくてや、両手もて輪をつくり、抱く様に臂のあたりまで火の上にかさしつ、眼しばたたきてありしが、いざとばかりに腰うちのばし、二足三足ゆかむとして立ちかへれり。燃えのこ

*Inspiration

りたる木の端端を掻集めて火に加へつ。勢よく燃土るを見ア心地よげに打笑みぬ。

翁のゆきし後、火は紅の光を放ちて、寂寞たる夜の闇の内に覺束なく燃えたり。夜更け、潮みち、童等が焚きし火も、旅の翁が足跡も、永久の波に消されぬ。(國木田獨歩「獨歩全集」)

一〇 靈感上

人は常に我が胷中の祕密を語らむとす。或は語らむと欲してこれを語る者あり、或は語る事なからむと欲して語る者あり。有心無心の差別はあれども、胷中の祕密は決して長く胷中に隠伏するものにはあらず、口に顯れざれば舉動に

顯れ、舉動に顯れざれば容貌（容）に顯る。

考へんべし

両手兩足 耳鼻口鼻

蓋し人の有する四肢・五官は、總てこれ心中の祕密を顯す

言ヒラス者

廣告者なり、吹聴者なり。如何に口に樂しと言ふとも、額に皺

知ラズ

の寄る、我その憂あるを知る。如何に無頓著なる風をなすと

知ラズ

も、頗に笑靨の立つ、我その樂しみあるを知る。或は溜息とな

目め

り、或は苦笑となり、或は赤面し、或は青筋を立つ、これ豈に爲

外ヲ表レルヲ抑ヘむト

にする事ありてなさむや。その胷中の祕密は、自ら抑へむと

四肢

欲して抑ふる能はず、直に此等の機關を透して自ら顯れ出

イテ

づるのみ。思を陳ぶる、何ぞ必ずしも三寸の舌のみならむや、

言ヒ表ハス

情を敘づる、何ぞ唯一枝の筆のみならむや。總て眼に閃き、顔

ツツ

に映じ、手に動き、體に發するもの、皆これ我が深微なる幽懷

心中

を述ぶる一の文章と謂はざるべからず。

管にこれのみならず、繪畫・彫刻・建築・音樂・詩歌・文章・宗教の

人々

如き、皆これ人心の反應たるに過ぎず。例せば巨勢金岡の「風

ミ

雷神の圖」に於ける、牧谿が「洞庭秋月の圖」に於ける、ミケラン

トウ

ジェロが「セントベテル寺の壁畫」に於ける、豈に必ずしも己

カ

が胷中を白狀せむが爲に之を畫きたるものならむや。然れ

カ

ども彼等が筆を執り、刷毛を揮ひ、繪具を紙若しくは布に接

自分

するに當り、己が胷中に有るもの、直に自家の胷臆を排して

カ

この畫中に映出せしなり。風雷神の英姿颯爽たる、洞庭秋月

カ

の神韻縹渺たる、セントベテル寺の壁畫の莊嚴雄麗なる、こ

カ

れ先づ彼等の胷中に風雷神あり、洞庭あり、上帝あり、而して

(四) St. Peter.

羅馬の寺院。

(三) Michelangelo.

(1475—1564) 伊太利の彫刻家・畫家。

(二) 平安朝の畫家。

(1100年代)

(一) 南宋の畫僧。(1200年代)

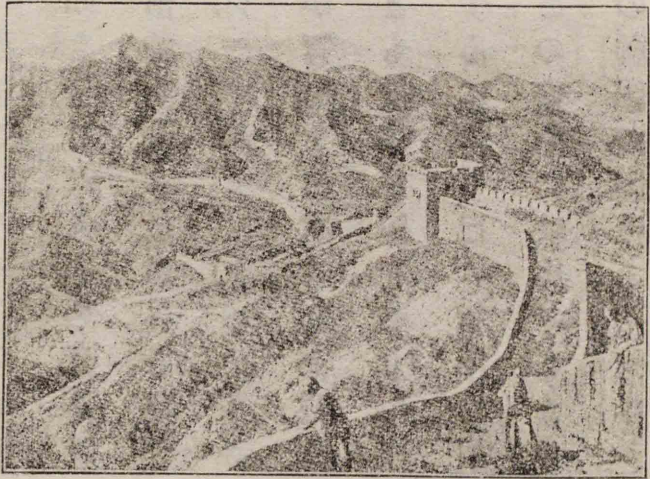
(一) Milton. (1608-1674) 英國の詩人。

(二) Shakespeare. (1564-1616) 字は子英、唐の詩人。元朝初期の小説家。(1600年代の作家)

(三) Victor Hugo. (1802-1885) 佛國の詩人。

(四) Beethoven. (1770-1827) 家、獨逸の作曲家。

(五) Wagner. (1813-1883) 作家、獨逸の樂曲家。



城 長 の 里 萬

心に充ち、手に溢れて、遂にかくの如き絶妙の畫圖を生ずるに至りしなり。豈に唯これのみならむや。ミルトンの「失樂園」に於ける、杜甫の「蜀中の詩」に於ける、施耐庵が「水滸傳」に於ける、ユーゴーが「噫、無情」に於ける、ベトーフエン・ワグネルが音楽に於ける、或は奈良の大佛の如き、或はモスコイの大鐘の如き、或は埃及のピラミッドの如き、或は萬里の長城の如き、その事物の偉大絶倫なるにも拘らず、總てこれ人の胷中より生じたる幻影に過ぎざるなり。人ただ其の現象の偉大絶倫なるに驚歎して、却てこの現象を生じたる人の心の更に偉大絶倫なるを知らず。蓋し偉大なる事物は偉大なる心より生じ、美妙なる現象は美妙なる心より生ず。

(六) Pyramid. (七) Moscow 露國の古都。

(八) Hamilton. (1788-1856) 者、英國の哲學者。

ハミルトン曰く、「世界に於て人より大いなるものは無く、人に於て心より大いなるものは無し」と。吾人實にその然るを信ず。而してこの心にして、突如として、我自ら我たるを忘れ、我自ら我より超越するに至ることあり。これを「靈感」と云ふ。靈感とは即ち人の思想感情の高潮にして、凡そ世の英雄・豪傑・孝子烈婦・忠臣義士・熱心なる宗教家・美術家・冒險者の如

き人人が、人を驚かし、世界を驚かすの事業を爲すや、必ずこの靈感の爲に鼓動せられたる數分時にあらざるはなし。唯この數分時の行爲は、器械的に働きたる幾年月の行爲に勝るは、吾人が常に信ずる所なり。史記の李將軍列傳に曰く、

廣出獵、見草中石、以爲虎射之、中石沒鏃、視之石也。因復更射之、終不能復入石矣。

と。蓋し石に中りて鏃を没するは、李將軍が平生の伎倆にあらず。乃ちこの電光一揮、羽箭空を飛ぶの閒こそ、以て靈感の働を察すべきなれ。

① 一 靈感下

靈感の大いなる力は、殊に品性の上に顯る。世の平凡なる歴史家若しくは傳記家の如きは、往往、英雄人を籠絡すと云ひ、而してその籠絡は斯くの如き手段、斯くの如き工夫にて爲せりとて、さも誇り氣に述べたつ。然れども試に彼等に問ふ可し。若し斯くの如き術にて出來得べきことならば、一たびその術を傳習するに於ては、恰も大工の術を學べば大工となるが如く、鍛冶屋の術を學べば鍛冶屋となるが如く、籠絡の術を學べば英雄となること容易なるべきか。殊に夫子自らは斯く英雄の祕術をさへ評き出したる人なれば、自らこれを行ひて英雄たるは容易なるべき筈なるに、彼等は英雄の伎倆を見抜き、その伎倆の存する所を解剖しながら、自

(一) 清の學者政事家。
 (二) 字は元龍、蜀主。
 (三) 諸葛孔明。(一八三—一八五)
 (四) 字は仲謀、吳主。
 (五) 字は孟德、魏主。
 (六) Caesar. (B. C. 100—44) 羅馬の政事家。
 (七) Cromwell. (1599—1658) 英吉利の政事家。
 (八) Gladstone. (1809—1898) 英吉利の政事家。

ら英雄の事を行ひ、英雄たる能はざるは何ぞや、知るべし、英雄人を籠絡すと云ふが如きは、決して智術に依るに非ず、即ち言ふに言はれぬ靈感のありて、その人に接するや、電氣の物に觸るるが如く、磁氣の物を吸ふが如く、離れむとするも離るる能はざらしむることを、趙翼嘗て二十二史劄記に於て劉備を論じて曰く、

至託孤於亮曰、嗣子可輔、輔之不可、輔則君自取之。千載之下、猶見其肝膈本懷、豈非眞性情之流露。
 と、豈に獨り劉備のみならむや、孫權と雖も、曹操と雖も、若しくはケイザルと雖も、クロムウェルと雖も、ゲラッドストーンと雖も、皆然らざるは無し。これを要するに、かの傍人が英雄

陳思之。(一八三—一八五)
 柳宗元。(一七九—一八六)
 蘇東坡の弟、字は子由。(一〇三—一一〇)

の行爲に就きて、種種器械的の評論を試むるは、恰も下等なる批評家が文章軌範の評釋を爲すが如し。漫に自家の臆慮を以て彼此の批評を爲し、恰も韓柳の諸名家は定規を以て文章を作りたるかの如く、雙關法と云ひ、抑揚頓挫の法と云ひ、波瀾擒縱の法と云ふ、焉んぞ知らむ、皆これ後人の牽強附會に過ぎざるを、彼等、豈に初より斯くの如き法に據りて文を作らむや。即ち蘇轍が、

豈嘗執筆學爲如此之文哉。其氣充乎其中、而溢乎其貌、動乎其言、而見乎其文、而不自知也。
 といへる類なるのみ、靈感の繪畫に顯るるときには、繪畫我を顯すに非ず、我即ち繪畫に顯るるなり。文章に於ても亦然

Esop. 西曆前六世紀
のギリシヤ人
*なりといふ。

り。我の思想を寫し出すに非ず、我即ち文章に顯るるなり、我が生命即ち文章に顯るるなり。例せば伊蘇普の譬喩ヒソップの如く、或は獅子となり、或は狐となり、或は狼となり、或は鼠となり、その顯るる所千變萬化すと雖も、要するに一の圓滿フルビト・美妙なる伊蘇普の智慧自らがこの間に發揮するのみ。吾人はこれを讀んで、その狼たると狐たるとを見ず、唯一の伊蘇普たるを見るのみ。

蓋し靈感は神力なり、哲學的ニテモ 哲學的に、自然的の發見を解 科學的に分解・説明する能はざる不可思議力なり。哲學者は世の中の不可思議力を退治せむと心掛け、中には大早計にも、最早、世間には不可思議力は無しなど言ふ人すら出て來れり。然れども不

可思議の領地は未だ容易に縮まるを見ず。勿論鬼神と思ひたる雷電も、今は之を使役し、神怒と思ひたる地震も、地中の火力作用なりと解説し、斯くの如く、理學の進歩と共に、多少世の所謂俗ニテモ 不思議なる物は除去せられたるが如しと雖も、その實は決して然ることなし、即ち人とは如何なるものか、何處より來れるか、何くに行くか、疑問茲此に到らば、人、彼自身も亦一の解釋する能はざる問題と言はざるを得ざるべし。人にして斯くの如しとせば、この人が不可思議力に支配せらるるも、亦何ぞ深く疑ふを須スひむや、蓋し靈感は神力なり。我自ら我より超越し、人自ら人より超越し、人間にあつて天使に類する行をなすが如きは、皆この靈感に本づく者なり。

*Jenne d'Arc.
(1412-1431)

佛國の女傑。

然らば靈感を養ふ道ありや。靈感の來る恰も風の如し、人これを捕ふる能はず。然りと雖も、若しこれを得る道ありとせば、吾人はただ一あるを知るのみ。曰く、純一これなり。これを詳言すれば、脇目も振らず、忠純專一、一所懸命に働くことこれなり。吾人嘗てユーゴーの語を聞く、曰く、婦人は弱し、然れども母は強し。と。弱き婦人も、母となれば強きは何が故ぞ。唯その幼兒を愛する一念は弱き婦人をして勇氣を生ぜしむるにあらざや。至誠は神明に通ず。凡そ人眞面目になり、純一になり、一所懸命になる時に於ては、弱き人も強く、愚なる人も智に、無用の人も有用となるなり。即ち火事場に於て主婦が俄に力を生じて、箆笥を持搬ぶが如き、ジョアン嬢が佛

國田舎の一女子を以て、能く英國の大軍を退けたるが如きは、ただ之あるが爲のみ。徳富蘇峯「靜思餘録」に抄る。

一二 歌人西行 上

天涯放浪の行脚僧

西行何者ぞ、天涯放浪の行脚僧、その名を一時の名流俊成と齊しくし、鎌倉室町の世、そもそも歌道に於て定家を難ぜむ輩は冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。といはれし時、稱讚の聲また定家に譲らず、近世に至つて定家の價値いたく墮落したれども、山家集の一書はをほ如何なる歌人の机邊をも去らず、西行の名今に嘖嘖たるは、そもそも何が故ぞ。

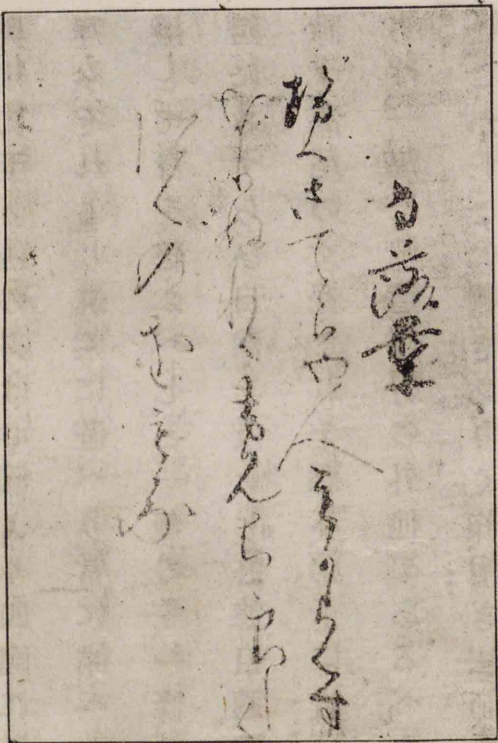
西行物語

西行法師、俗名は佐藤義清、鎮守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代代武を以て家を立つ。義清また勇敢にして弓術をよくす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり。左兵衛尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せむとす。されど義清は名利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機については、或は傳へて曰く、嘗て同族左衛門尉憲康と同行して鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝、參朝せむとて、約に従ひて憲康を誘へるに、門の邊に人立騒ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、殿は昨夜頓死したまへり。とて、若き妻老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念愈、堅く

寺落葉
せきてらや人
もかよはずな
りのれはもふ
ちよりしくは
はのをもかな

一八〇〇

官を辭して許されざれども、棄恩入無爲は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びてとりすがれるを、これ



西行法師筆蹟

いふ。出家せる時は保延六年にして、その歳まさに二十三なりきといふ。

こそ愛著の絆を
断つはじめぞと、
願みもせて家を
遁れ出て嵯峨に
至りて剃髮せり。
と。かくて名を西
行または圓位と

西行既に世を遁れて、高野に籠り、吉野に隠れ、出でては熊野に参り、伊勢に詣て、鎌倉に下りて右幕下に見参し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて、大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく、桑門に家なし抖擻して身を終ふべし。と。一蓋の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東西にさすらひ、自然を友とし、悠悠自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺これを惡み、弟子に告げて曰く、遁世の身ならば、一筋に佛道修行の外他事あるべからず。數寄を立ててここかしこに嘯きありく條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭をうち割るべし。と。その後高尾の法華會に行脚の僧の参りあひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて二宿を

請ふあり。誰ぞと問へば、西行と申す者といふ。文覺手ぐすねを引き、望の協ひつる體にて、あかり障子を開きて出づ。しほしまもりて、年頃承り及びたるに、御尋悦び入り候。とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子たちはいかなる事の出でこむかと、手に汗を握りたるに、この體たらくにて、西行は無事に歸り去りしかば、日頃の仰にたがひたるは。と怪しみ問ふ。文覺答へて、あら、いひがひなの法師どもやあれは文覺に打たれむずる者のつらやうか、文覺をこそ打たむずるものなれ。といへりといふ。

西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせむことを思ひて、詠じて曰く、

一八五〇。

ねがはくは花のもとにて春死なむ、

そのきさらぎの望月のころ。

晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十六日、七十三歳にして入滅せり。その和歌を集めたるもの即ち山家集なり。

わが國古來詩人多しといへども、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの前後僅に三人、西行・宗祇・芭蕉これなり。西行はこれが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず、西行に私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乗じて、また西行宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は

應仁元年(三三〇)より文明九年(三五七)まで十一年間。元祿元年は二三四八に當る。

連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、各その道に一期を劃せし三家が、いづれも亦風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかに詩人の吟囊を肥すものなるかを知るべし。

一三 歌人西行下

そもそも平安朝の貴紳淑女は、鴨・桂・二川の流域數里の閑を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐して、足畿外に出でず一生の經過極めて單調に、感情を刺衝するものなければ、従うて思想の發展もある事なし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外に知らざれば、詠

ずる所の和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖父を承け
 ただ同じ詞花、言葉を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌
 の思想辭句の上にもおのづから典^型を生じて、天眞を忘れ
 たり。かく實情を欺き、虚偽に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾り
 てその内容を問はざりし時、西行獨り蹶起して、從來蹈襲せ
 る典型を簸却し、自ら山水の間に逍遙して、直接に自然の隱
 微を探り、感得する所多かりき。平安朝の末、崇徳院の御製が
 殊に斷腸の響あるは、その悲惨なる實境を詠じ給へること
 の、世上一般の題詠と撰を異にすればなり。わけて西行が歌
 ふところ、一も古人の粉本を摹倣せず、一字一句みな己が肺
 腑より出づ。數百年の後なほ名聲赫赫として、天成の大才と

許さるることまた宜ならずや。

西行既に古來の典型を捨てて、直に自然の堂奥に入らむ
 とす。深く山川草木を愛して、これを視る事猶己を視るが如
 く、同情の念に堪へざるは固より然るべきことなり。

わきて見む、老木は花もあはれなり、

こゝにまた、我が住みうくてうかれなば、

松はひとりにならむとすらむ。

濁るべき巖井の水にあらねども、

汲まば宿れる月やさわがむ。

同情は進んで愛著となりぬ。西行は官祿を捨てたり、妻子

を捨てたりすべて世間を捨てたりされどゆかしき花よ月よ。

おのづから花なき年の春もあらば、

何につけてか日を送らまし。

うちつけに、また來む秋の今宵まで

月ゆゑ惜しくなる命かな。

愛著は迷なり。この雲を去らざれば、眞如の月は明かなり

難しと雖も、山水もと無心にして、人間の如き魔性を有せず

これを以て窗前日夜の友とす。清淡虚無一心もまた物によ

つて動かされざること山の如く機に従うて轉ずること水

の如し。來往自在、ここに疑懼の境も去つて安心は漸く決定

すべし。

今更に春を忘るる花もあらじ。

安く待ちつつ今日もくらさむ

雲にただ今宵の月をまかせてむ。

厭ふとしても晴れぬものゆゑ。

西行の信仰は、これを佛徒として見ば、なほ或は差別の見

を脱する能はざる小安心に過ぎざらむ。しかも世を擧げて

剪綵の末技に汲汲たるとき、巍然として衆俗を抜いて立ち、

直に天然に接觸して、感ずる所即ち歌となれり。その歌は企

て成すものにあらずして、自ら成れるなり。その自然にし

て平易に、殆ど斧鑿の痕を存せざるはそれが爲なり。

未の末の切の用也。

ながむるに慰むことはなけれども。

月を友にてあかすころかな。

今よりは昔がたりは心せむ。

怪しきまでに袖しをれけり。

要するに西行はうまれながらの歌よみにして、歌を作る

ものに非ず、天籟吹來つて松濤即ち鳴る、その聲必ず自然を

離れず、平易率直を旨とすれども、風淒じければ鳴ることも

亦強し、時に婉曲の響あれども、故らに人為の巧を加へねば、

天成の詩美は千歳の下愈、光を増して、後人をして渴仰止ま

さらしむるなり。(藤岡東圃一國文學全史)

一四 銀の猫

文治二年(一一八四六)
右大將源頼朝

文治その年の秋八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮

居に詣てさせ給ふ。例の事にて、御供仕うまつる人人、御前連

ひ、御後べ仕うまつれる、渚に遊ぶ蘆鶴の歩みして、疾からず

遅からず、列を亂さず練りいでさせ給へるを、大略に膝折り

ふせ、畏み奉る人數多あるに、警衛して、あなただに言はせず、

世にいかめしく尊き御有様なり。

廣前を罷りて、御手輿に召させ給ふほど、御階の忌垣のも

とにかしこまり居る法師の見上げ奉る面つき、旅に飢ゑて

いと痩せ黒みづきたるに、衣、杖、笠なども乞食者の様したる

を、鋭き御眼尻にとどめさせ給ひ、ただ人ならずや思しけむ、

雲水
珠
水

西伯將_レ出獵_一ト
之_レ曰_レ所_レ獲_レ非_レ
龍_レ非_レ靈_レ非_レ虎_レ
非_レ龍_レ所_レ獲_レ霸王_レ
之_レ輔_レ於是_レ西伯
獵_レ酒_三公_於
渭_之陽_一史記

「あの法師が修行するやう、名をも問へ。」と仰せ給ふ。御輿ぞひ
の若侍、急ぎ走り寄りて、「ありがたく御目給へり。何處よりの
修行ぞ、名をも申せ。」といふ。ゆくりなきに驚きたる様して、雲
水に在處定めず侍るものにて、名は圓位と申す。」といふ。聞召
されて、さればこそ聞知りたれ、穴熊の猛き獲物の類ならて、
賢き人得たるためしに誘ひ歸らむ。わが後につきて來れと
いへ。とて、召連れさせ給へり。

御館に入らせ給ひ、御裝束あらためさせ給へば、やがてお
ぼとなぶら敷多てらし掲げたり。けふの道行つと率てことと
仰せ給ふ。法師まゐれ。とて、御座近き簀子に召されたり。大將
殿見おこせ給ひて、昔は藐姑射の山の御宮仕せし人の世を

はかなきものに思ししみて、身は黒く糞したれど、月花の響
は物の心なきあづま人さへ聞知りたるぞ。八百日ゆく濱の
眞砂の中には、玉ども多く拾ひをさめたらむを、語りて聞か
せよ。」と仰せ給ふ。

「いと輝かしきにぞ、ただ夢路を辿るやうに侍りて、聞え
奉るべき事も侍らず。さとき御眼に見あらはされて侍るこ
そいとも有り難けれ。伊勢の海清き渚におりたつならひは
侍れど、よろしき貝をだにえ拾ひ侍らぬに、これとて捧げ奉
るべくもあらず。君にも豫て學ばせ給ふと漏り聞き奉る。天
の下まつりごち給ふ御器の大いなるに思し寄りせ給ふに
は、かけても及ぶまじきをさへ思ひ知り侍る。大空に羽うち

て飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の音、いかで取りなめて聞え上ぐべき。あな畏しと申す。

打笑ませ給ひ、弓取りし人の元の心の猛きには、詠む歌も直く明らさまにと聞くは實か。歌は武士の荒荒しき心には詠み得まじきものに、宮人達は沙汰し給へりとや。軍に出立ちて、笛・鼓の音、馬の嘶は物とも思はぬを、この三十文字餘りの學には心の後るるは如何に。こは畏き御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代代の帝は、馬に鞍おき御弓矢取らしして御軍に立たせ給ひし、その御歌を讀み見奉れば、猛く直直しく、調もいと高しとこそ聞きわたり侍れ。いでや、歌よまむとては、ますらをの心を取隠し、あてになよびかたのみ詠みい

大風起兮雲飛揚、威加四海内、分賜故郷。安得猛士兮守四方。(漢高祖)
月明星稀、烏鵲南飛、邊樹三匝、何枝可依。山不厭高、海不厭深。周公吐哺、天下歸心。(曹操)

鎮守府將軍藤原秀郷、圓位の子父。

てまくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君がさとく猛き御心のままに打詠ませ給はむには、今の世の人、誰かは並びあへ奉らむ。三尺の劔を取りて、大風起り雲飛揚すと歌ひ、槊を横へて、烏鵲南にと詠ぜし君達は、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。玉造等がいみじく磨りみがきたるも、染殿のやしほの色もはかなき目移りばかりは何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩み、いづれの道、何の業にも、初より優れたらむは鬼にこそ侍らめといふ。

「人人あれ聞き給へ。世は捨て遁るとも、頼もしき人の心をらずや。圓位よ。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手となむ聞ゆる。傳へたる事もあるべし。かくこそと

思ひしみる事は忘れずてぞあらむ。事一言にても教へ承らばや。こは益恐ある御問はせなり。御物語の果て果ては、武士の道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山を住處の瘦法師にだに問はせ給ふことの忝さよ。向ひ奉りては、鳥澁がましく、何をかは家の傳はりなどとして聞え奉るべき。まして有り難き大宮仕を否み奉り、親たちの慈しみをさへあだなるものに思ひなして、年僅に二十三にして家を出てたるいたづら者の、弦ひかむすべだに心にもとどめ侍らず。ただ一言の忘れがたきは、賞を重くし罰を軽くせよと云ひしと、任ずるものを辱しむれば危しと云ひし事とのみ病める士卒の痘を吮ひしは人の心をよく買ひなすと雖も、眞の情よりと

卒有病者、起爲吮之。(史記、吳起傳)

孫臏傳、齊軍入魏地、爲二十五萬、明日爲三十五萬、又明日爲三萬、竈、穰田行三日、大喜曰、我固知齊軍怯、入吾地三日、士卒亡者過半矣。乃棄其步軍、與其輕銳、倍日并行逐之。孫子度其行、暮當至馬陵。馬陵道狹、而於多阻隘、可伏兵。乃斫大樹、白而書之曰、穰田死于此樹之下。(史記、孫子傳)

も覺え侍らず。竈を滅して人を危きに陥るるは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下を知るべき君の御心にあらざれば、軍を出し給へる事の怪しきまで賢くおはするを餘所ながら聞き奉るには、この方の御問、免させ給へ。とて、額を板敷に擦りつけて申す。
君笑みほこらせ給ひ、口とく、心さかしき法師なり。今宵は月見る夜ぞ、人人と土器取りはやし、曉かけて遊ばむ。まらうどは酒呑まさるべし。鹿猿の中に立交りて歌詠めといふとも、詠むまじ。ただ我が前にて遊べ。飽かず飲み、物きたなげに喰ひちらす。人人は暖かにこそ、風ひややかなるに、この火取りて法師に參らせよ。とて、白銀をもて作れる、猫の形したる

を取傳へて、君より賜はず。とて、前に置きたり。鹿猿はなほ心
 猛し、鼠をだにえ捕らぬ。瘦法師がためには、げに似つかはし
 き御賜物ぞ。とて、三度押戴きて、翌朝御暇賜はりて立出づる
 に、御館の人やどりに誰人の童ならむ、括り袴の裾朝露に濡
 れそぼちで、いと寒げに居るを見て、これ取らせむ。火埋みて
 手足あたたためよ。とて、かのきらきらしき物を與へて、顧みも
 せて立去りぬ。

童打驚きて、これ見給へ、見も知らぬ法師の、見も知らぬ物
 賜ひつるは。とて、青侍に見すれば、目口をはたげ、かく尊き寶
 物を誰かは得させむ拾ひやしつる。といふ。さらに更に道の
 そらに斯かる物やはあるべき。あな恐し、殿に奉りてたまへ。

といふ。やがて御館にもて参り、仕ふる君を呼びいでて、しか
 じかの事をむと申す。いと怪し、大將殿の法師に賜ひしを、争
 て童には得させせむ。訝し。とて、まづ急ぎて聞え奉る。君、打笑
 み給ひ。かの似而非法師、あなづらはしく、幼げなるものくれ
 しとて、腹立たしくや思ひけむ。わが門の前に捨てゆきつる
 よ。一度似而非者の手に穢れしもの、その童に取らせよ。とて
 取りおろさせ給ひぬ。

西行、後にこの事を人に語りていふ。右府は寔にねちけた
 る君なり。口に蜜あれど心には針のおはするぞ。漢高の大度
 曹孟徳の智略あるに似て、天下の人、皆この君の網の中に入
 れられたるは、佛の冥福といふことを生れ得たまひけむ。た

心なき身にもあ
はれは知られけ
り、鴨立つ澤の
秋の夕ぐれ、僧
西行)

阪上田村廣
藤原利仁。

そのかみ
このかみ

だ悲しむべきは、神の御裔の、此の後やうやう衰へさせ給は
む世の姿なるは、とて、涙留め難くして物がたりしとなむ。心
なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずも、打撃みぬ
べし。(上田秋成一藤室冊子)

一五 鎌倉三代

武きもののおこりを尋ねれば、古の田村利仁などい
ひけむ將軍どもの事は、耳遠ければさしおきぬ。そのかみよ
り今まで、源平の二ながれぞ、時により、折にしたがひて、おほ
やけの御守とはなりにける。
桓武天皇と聞えし御門をば、柏原帝とも申しけり。その御

高見王
高望王
國香貞盛
維衡正度
正衡正盛
忠盛清盛

子に式部卿の御子と聞えしより五代の末に、平將軍貞盛と
いふ人、維衡維時とて二人の子をもたりけり。閑近く榮えし
西八條の清盛のおとどは、かの太郎維衡より六代の末なり
き。その一門亡びしかば、この頃は僅にあるかなきかにぞさ
まよふめる。さて、かの維時が名残は、ひたすらに民となりて、
平四郎時政といふ者のみぞ、伊豆國北條とかやにあめる。そ
れも、維時には六代の末なるべし。
又、源氏武者といふも、清和御門、あるは宇多院などの御後
どもなり。二條院の御時、平治の亂に、伊豆國蛭が島へ流され
し兵衛佐頼朝は、清和御門より八代の流に、六條判官爲義と
いひし者のうま子なり。左馬頭義朝が三郎になむありける。

身永元平

後白河天皇の尊稱。

西八條の入道おとどやうやう榮華衰へむとして後白河
 院をなやまし奉りしかば安からずおぼされてかの頼朝を
 召出でて軍を起し給ひしに然るべき時やいたりにけむ平
 家の人人は壽永の秋の木枯に散りはてて遂にわたつ海の
 底の藻屑と沈みにし後頼朝いよいよ權を施して更に君の
 御後見仕うまつる。相模國鎌倉の里といふ所に居りながら
 世をたなごころの中に思ひき。皆人知り給へる事なれば今
 更に申すもなかなかなれど院の上位につかせ給ひし初よ
 り世のかためとなりて文治元年四月二のはしをのぼりし
 も八島の内のおとど宗盛をいけどりの賞と聞ゆ。建久の初
 つ方都にのぼる。その勢のいかめしき事いへば更なり。その

追捕使
 親族ヲテ
 三 破 遣 ス

比叡山の座主慈四の敬稱。

年の十二月九日權大納言になされ右近大將をかねたり。師
 走の朔日ごろよろこび申して同じき四日やがてつかさを
 還し奉る。この時ぞ諸國のそうつるぶくしといふことうけ
 たまはりて地頭職にわが家のつはものどもなし集めける。
 この日本國の衰ふる初はこれよりなるべし。
 さて東にかへり下るころ上下いろいろのぬさおほかり
 しなかに年ごろも祈りなどし給ひにし吉水僧正のたまひ
 つかはしける。
 あづまぢのかたになこそその關の名は、
 君をみやこに住めとなりけり。
 御かへし頼朝

土御門天皇の尊稱

みやこには、君にあふさかちかければ、
なこそその關はとほきとをしれ。

かくて新院の御位の初つ方、正治元年正月、あづまにて頭
おろして、同じき十三日に年五十三にてかくれにけり。

治承四年より、あめの下にもちひられて、二十年ばかりや

すぎぬらむ。北の方は、先に聞えたる北條四郎時政の女なり。

その腹に、をの子ふたりあり。太郎をば頼家といふ、弟をば實

朝と聞ゆ。大將かくれてのち、兄はやがて立ちつぎて、建仁元

年六月二十二日、從二位、同じき日、將軍の宣旨を賜はる。又の

年、左衛門督になさる。かかれども少し落ちぬ心ばへなど

ありて、やうやう、つはものども、背き背きにぞなりにける。

後見役

執

時政は遠江守といひて、故大將のありし時より、わたくし

のうしろ見なりしを、まいて今は孫の世なれば、愈、身重く、勢

そふこと限なくて、うけぱりたる様なり。子二人あり。太郎は

宗時といふ、次郎は義時といひけり。次郎は心もたけく、魂ま

される者なるが、左衛門督をばふさはしからず思ひて、弟の

實朝の君に附從ひて、思ひ構ふる事などもありけり。かうは

日にそへて人にも背けられ行くに、いみじき病をさへして、

建仁三年九月十六日、年二十二にて頭おろす。世の中残り多

く、何事もあたらしかるべき程なれば、さにそ口をしかりけ

めをさなき子の一萬といふにぞ世をば譲りけれど、うけ引

くものなし。

入道は

かの病つくろはむとて、鎌倉より伊豆國へ、いづ
あびに越えたりける程に、かしこの修善寺といふ所にて、つ
ひにうたれぬ。一萬もやがてうしなはれけり。これは實朝と
義時と、ひとつ心にたばかりけるなるべし。

さて今はひとへに、實朝故大將の跡をうけつぎて、官位滞
る事なく、よろづ心の儘なり。建保元年二月二十七日正二位
にせられしは、閑院の内裏造れる賞とぞきこえ侍りし。同じ

き六年、權大納言になりて左大將をかねたり。左馬頭さへぞ
つけられける。その年、やがて内大臣になりても、なほ大將も
とのままなり。父にもやや立ちまさりて、いみじかりき。
このおとどは、おほかた心ばへうるはしく、猛くもやさし

征夷大將軍

大德 僧侶 (音通)

くも、よろづ目やすければ、ことわりにも過ぎて、武士の靡き
従ふさま、父にもこえたり。いかなる時にかありけむ。
山はさけ海はあせなむ世なりとも。
君にふたごころわがあらめやも。

とぞよみける。
時政は建保三年にかくれにしかば、義時ぞ跡をつぎける。
故左衛門督の子にて公曉といふ大德あり。親のうたれに
しことをいかで安き心あらむ。いかならむ時にかとのみ思
ひわたるに、この内大臣、又右大臣にあがりて、大饗などめづ
らしく東にておこなふ。京より、尊者をはじめ、上達部殿上人
おほくとぶらひいましけり。さて、鎌倉にうつし奉れる八幡

こせう 扈從

の御社に神拜に詣づる、いといかめしきひびきなれば、國國
 の武士は更にもいはず、都の人人もこせうしけり。たち騒ぎ
 ののしり、物見る人も多かる中に、かの大徳うちまぎれて、女
 のまねをして白きうす衣ひきかづき、おとどの車よりおる
 る程を、さしのぞくやうにぞ見えける、あやまたず首を打落
 しぬ。その程のとよみ、いみじさ、思ひやりぬべし。かくいふは
 承久元年正月二十七日なり。そこらつどひあつまれるもの
 ども、ただあベニされたるほかなし。京にも聞召しおどろく。世の
 中火をけしたるさまなり。こせうに、西園寺の宰相中將實氏
 もくだり給ひき。さらぬ人人も泣くなく袖をしぼりてぞの
 ぼりける。いまだ子もなければ、たちつぐべき人もなし。事し

尾將軍の敬稱。

づまりなむ程とて、故おとどの母北のかた二位殿といふ人
 二人の子をも失ひて、涙ほすまもなく、しをれすぐすをぞ將
 軍にもちひける。(増鏡)

一六 徒然草抄

一、花と月

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむか
 ひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれ
 になさけ深し。咲きぬべき程の梢、散りしをれたる庭などこ
 そ見所おほけれ。歌の詞書にも、花見にまかりけるに、早く散
 りすぎにければ、とも、障る事ありてまからで、など書けるは、

たれこめて春のゆくへも知らぬまに、待ちし櫻もうつろひにけり。(古今集、藤原國香)

「花を見て」といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひはさる事なれど、殊にかたくななる人ぞ。この枝かの枝散りにけり、今は見所なし。などはいふめるよろづの事は始終こそをかしけれ。望月のくまなきを千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ちいてたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほどまたなくあはれなり。椎柴・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ身にしみて、こころあらむ友もがなと、都こひしうおほゆれ。

すべて月花をばさのみ目にて見るものかは。春は家をた

ち去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

二、同じ心ならむ人

おなじ心ならむ人としめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まむこそうれしかるべきにさる人あるまじければ、露たがはざらむと向ひみたらむは、ひとりある心地やせむ。互にいはむほどの事をば、げにと聞くかひあるものから、いささかはたがふ所もあらむ人こそ、我はさやは思ふなどあらそひにくみ、さるからさぞ。ともうちかたらはば、つれづれなくさまめと思へど、げには少しかこつ方も、我とひとしからざらむ人は、大方のよしな

しごといはむほどこそあらめ、まめやかの心の友には、迥に隔たる所のありぬべきぞわびしきや。

三、人の心

人の心すなほならねば、偽なきにしもあらずされどおのづから正直の人などかなからむ。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。至りて愚なる人は、たまたま賢なる人を見てこれを憎む。おほきなる利を得むがために、少しき利を受けず、いつはり飾りて名を立てむとすとそしる。おのれが心にたがへるによりて、このあざけりをなすにて知りぬ。この人は下愚の性うつるべからず、いつはりて小利をも辭すべからず。かりにも愚をまなぶべからず。狂人の

まねとて大路を走らば、則ち狂人なり。悪人のまねとて人を殺さば悪人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。偽りても賢を學ばむを賢といふべし。

四、折節のうつりかはり

折節のうつりかはるこそ物ごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いまひとときは心もうきたつものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草もえ出づる頃より、やや春ふかく霞み渡りて花もやうやうけしきだつほどこそあれ、をりしも雨風うちつづきて、心あわただしく散りすぎぬ。青葉になり行くまでよ

*
春はただ花のひとへに咲くばかり、物のあはれは秋ぞ優れる。
(拾遺集、讀人知らず)

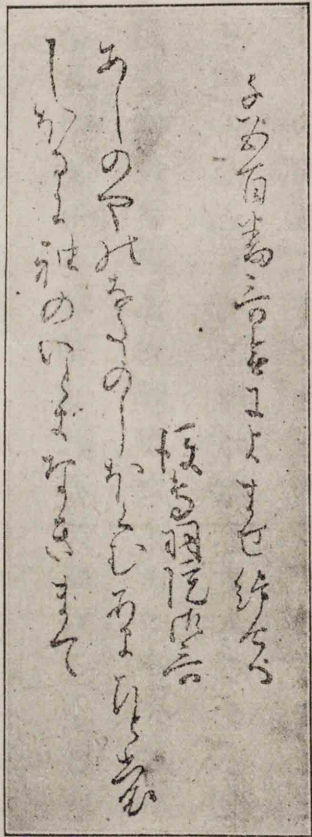
五月待つ花橘の香をかかげ、昔の人の袖の香ぞする。古今集、讀人知らず。
 (三) 色よりも香こそあはれと思ほゆれ、たが袖ふれし宿の梅ぞも。
 (古今集、讀人知らず)
 (三) 賀茂の葵祭。

ろづにただ心をのみぞなやまず。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅のほひにぞ、古の事もたちかへりこひしう思ひ出でらるる。山吹のきよげに、藤のおほつかなきさましたる、すべて思ひすて難きこと多し。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行くほどこそ、世のあはれも人のこひしさもまされ。と、人の仰せられしこそげにさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる頃、水雞のたくなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕まつるこそなまめかしけれ。やうやう夜寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、早稲田かりほすな

どとりあつめたる事は、秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそをかしけれ。

千五百番歌合
 によませ給け
 る
 後鳥羽院御歌
 あしのやのな
 たのしほくむ
 あまひともし
 ほるに袖のい
 とまたきまて



吉田翁好筆蹟

さて冬
 枯の景色
 こそ、秋に
 はをさを
 さ劣るま

じけれ。汀の草に紅葉の散りとどまりて、霜いと白うおけるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて人ごとにいそぎあへる頃ぞ、又なくあはれなる、すさまじき物にして見る人もなき月の寒けくすめる、二十日あまりの

十二月十九日よ
り三日間、佛名
を唱ふる公事。
御陵と功臣の墓
とに幣帛を奉る
救使。
十二月晦日の夜
に、悪鬼を追ふ
公事。
元且寅の時に、
天皇、四方及び
山陵を拜し給ふ
儀式。

空こそ心細きものなれ。御佛名荷前の使立つなどぞ、あはれ
にやむごとなき。公事どもしげく、春のいそぎにとりかさね
てもよほし行はるるさまぞいみじきや
追儼より四方拜につづくこそおもしろけれ。つごもりの
夜いたう暗きに、松どもともして、夜半すぐるまで人の門た
たき走りありきて、何事にかあらむ、ことごとしくののしり
て、足を空にまどふが、暁がたよりさすがに音なくなりぬる
こそ、年のなごりも心細けれ。亡き人のくる夜とて魂祭るわ
ざは、この頃、都にはなきを、あづまの方にはなほする事にて
ありしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、き
のふにかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地

ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかに、うれしげなる
こそまたあはれなれ。(吉田兼好―徒然草)

一七 おらが春

昔、丹後の國普甲寺といふところに深く浄土を願ふ上人
ありけり。年の始は世間は祝をしてさざめけば、われもせむ
とて、大晦日の夜、ひとり使へる小法師に、手紙したため渡し
て、あすの暁にしかじかせよと、きと言ひをしへて本堂に泊
りにやりぬ。

小法師は元日の旦、いまだ隅隅は小暗きに、初雞の聲と同
じくがばと起きて、教のごとく表門を丁丁と敲けば、内より

「何處より」と問ふ時、「西方彌陀佛より、年始の使僧に候」と答ふるよりとく、上人はたしにて踊り出て、門の扉を左右へさつと開きて、小法師を上座に請じて、きのふみづから認めしかの手紙をとりて、恭しく押戴きて讀みて曰く、

それ世界は衆苦充滿に候間、とくわが國に来るべし。

聖衆出迎へて待入り候。

と讀みをはりて、おうおうと泣かれけるとかや。

この上人、みづから企み持へたる悲しみに、みづから嘆きつつ、初春の淨衣をしぼりて滴る涙を見て、祝ふとは、ものに狂へる様ながら、俗人に對して無常をのぶるを禮とすると聞くからに、佛門に於ては祝の骨頂なるべし。

それとは些か變りて、おのれらは俗塵に埋れて世渡る境涯ながら、鶴龜にたぐへての祝ひつくしも、厄拂の口上めきて空空しくおもほゆれば、から風の吹けば飛ぶ屑家は屑家のあるべきやうに、門松立てず、煤掃かず、雪の山路の曲りなりに、今年の春もあなた任せになむ迎へける。

めでたさも中位なり、おらが春。

こぞのさつきに生れたるわが娘に、一人前の雜煮の膳を据ゑて、

這へ笑へ、二つになるぞ、今朝からは。

（小林一茶—おらが春）

一八 狂歌

永正(三六四—三六八)狂歌合に見ゆ。

大阪の人、狂歌の一派鯛屋派の祖、又油煙齋と號す。(三三四—三三五)

散ればこそいとど櫻はめでたけれ、憂世に何か久しかるべき。(伊勢物語)

ぬば玉の木の
下闇の黒米も、
つきいでてこそ
しらげそめけれ。
鯛屋貞柳
讀人不知

富士の山夢に見るこそ果報なれ、
路銀もいらす草臥れもせず。

散ればこそいとど櫻はめでたけれ、
けれどもけれどもさうぢやけれども。
唐衣橘洲

うつて來る波の受太刀満つ潮の

さし心得て飛ぶ千鳥かな。

限なき君が齡や

うらやまむ、

鶴は千年、龜は萬年、

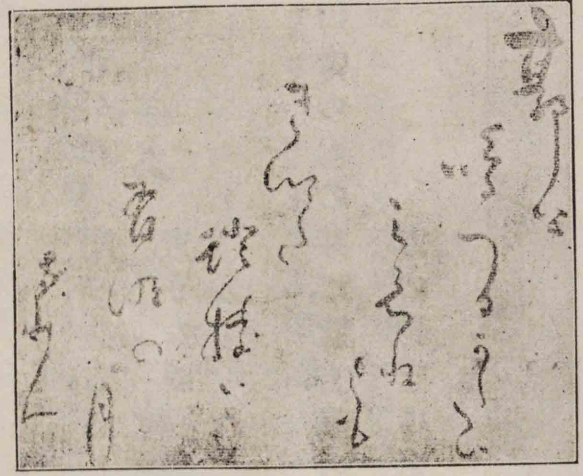
四方赤良

時鳥啼きつる

あとにあきれたる

後徳大寺の

有明のかほ、



四方赤良筆

一面の花は碁盤の上野山、

黒門前にかかる白雲。

蜀山人。
ほととぎすなきつる方をながむれば、唯有明の月ぞ残れる。(百人一首、後徳大寺左大臣)

蜀公鳴つるかたはみ文れともきいた證據は有明の月
蜀山人

すみだ川、今は吾妻の都鳥、

業平などは在五中將。

朱樂菅江

やれやれと、潮のひるめしいそぐなり、

青うなばらゝへるにまかせて。

元空網

田樂の木の芽に腹も春の野や、

霞の帯をゆるめてぞ喰ふ。



宿屋飯盛筆蹟

山崎氏。(三三六—三三六)

渡邊氏。(三三三—三三七)

歌よみはへた
こそよけれ天
地のうこま
たしてたま
ものかは
飯盛

石川雅望、又、六
樹園と號す。(三
三三—三三三)

花川氏。又、狂歌
堂と號す。(三三
三—三三三)

世わたりの道に二つの追分や、

宿屋飯盛

たからの山に借金の山。

鹿都部眞顔

争はぬ風の柳の絲にこそ、

堪忍袋縫ふべかりけれ。

一九 米人の理想主義

米人は何事にも徹底的の國民である。同じく徹底的だと
いつても、露西亞人は動もすれば消極的・破壞的・否定的の傾
向を有するが、米人は之と全く正反對に、その徹底主義は飽

くまでも、積極的・建設的・肯定的である。随つて何時も晴やかな樂天主義・奮闘主義となつて勇往邁進しようとする。彼等が新しき事物を採用するに急なのも、大規模の百年の計を廻らすのも、亦一にこの徹底的樂天觀があるからである。その民主政治は此の如くにして成り、その物質文明もまた此の如くにして興つた。

米人は又未來に生きる國民である。徹底的にして且つ未來に生きむとする者は、勢、理想家たらざるを得ない。彼等が極めて刹那主義の現實主義者であるにも拘らず、その半面には極端なる理想主義の傾向を有つてゐるのはこれが爲である。そしてこの理想主義は疑もなく清教徒から傳へら

れた濃厚なる宗教的色彩に染められてゐる。

歐洲舊國の羈絆を振りすて大西洋の彼方、未見の新世界に憧れて、其處に自己の信仰と努力とによつて、地上樂園を建設せむとして移住した百二人の清教徒は、大なる理想家であつた。次から次と移り來つて、絶えず新しい生命の力を齎す新來の移住民も、亦同じく理想家であつた。そして直接間接にこの最初の清教徒の影響・感化を受けて今日に至つたのである。米人の生活には燃ゆるが如き青春の浪漫主義がある。宗教的理想主義がある。彼等は今もなほ地上に「神の國」を實現せむことを理想としてゐる。まづ之を新英州の諸國に始めて、合衆國の全體に及ぼし、更に之を南北兩米に擴

(二) Bryan. (一) Jefferson.
(1860-) (1743—1826)
(三) Willson.

めて全米主義を提擧し、今やまた平和強制同盟を唱へ、獨逸の軍國主義を打破して、全世界を民本主義の理想的合衆國となさむと努力しつつある。その國民的理想の高遠にして、遠大なる眞に驚くべきである。

日本の政事家に高遠の理想があるか無いかは、いふべき限ではない。併し米國の政事家には昔ジェファソンの如き理想主義者が多かつた様に、今もなほ前の國務卿ブライアン氏の如き、純然たる宗教的理想主義を持する政事家がある。前大統領ウィルソン氏の如きも、亦今代の最も大なる理想主義の政事家たるは識者の認むる所である。ただ或種の淺薄なる現實主義者の中には、今もなほウィルソン氏が宣

戰の眞意の那邊に在るやに疑を抱く人も尠くないと聞くが、大統領が歐洲戰爭突發以來の言論と政策と態度とを公平に考へれば、氏の高遠の理想が單に口先だけでない事が首肯せられる。民本主義と正義と人道と自由とを人類の大理想なりとした清教徒の宗教的精神が、依然として今の民主黨政府の半面にも儼存せる事だけは疑ふべきではないと思ふ。ただその時時の施設に、批評と非難とを招く多くの點のある事は、いふまでもない。

元來、清教徒の宗教は、行爲その者に重きを置くことを特色としてゐた。即ち信仰は何等かの社會的行爲に現れて始めて價值ありと見るのが、米人傳來の精神で、現代に至つて

この傾向は益盛であるために、彼等は今日の國際關係、社會問題、經濟狀態などの上に、基督教道德の理想郷を樹てようと絶えず焦慮し努力してゐるのである。女子、幼者の保護、貧民學校の設立、病院、感化院などの事業、種種の社會改良運動、さういつたやうな方面の團體に關する記事が、二つや三つ新聞に出てゐない日はない。まづ中流以上の米人で、此等の會や團體の八つや九つに關係してゐない人は稀だといつてもよからう。數年前の統計で見ると、教育、宗教、慈善等の事業に、箇人として米人が寄附した金額は、一箇年の總額六億三千萬圓を超過してゐる。余が滯米中にも白耳義罹災民への寄附金の如きは、莫大なる金額に達してゐる事を見た。此

の如きは米國でなければ決して見られない現象である。海の彼方に新しい理想郷を建てようとして、新英州に渡つて來た清教徒は、ただ夢幻の國に果敢ない理想の影を追ふやうな浪漫主義者ではなかつた。彼等が浪漫的な半面には、實行の世界、現實の生活に於ける絶えざる努力があつた。彼等は終始一貫して信念と實行とを結び著けなければ止まない奮闘の人であつた。最初、新世界に移住して來たその年の冬、凜烈なる寒氣に悩まされて彼等の多數は命を殞した。それにも屈せず、僅な生存者は生活の爲の惡戰苦闘を續け、その子孫は爾後二三世紀を出でずして先住の民を追ひ、佛蘭西人、和蘭人を同化し、西班牙人を驅逐し、遂には祖國た

*Anglo-Saxons.

る英國の羈絆をさへ脱するの偉業を成就した。そして今もなほ世界の各地から蝟集する新來の移住民を同化するか、然らずんば之を驅逐し根絶せむとしつつある有様である。現に此の度の米獨開戦の如きも、かの動もすればアングロ・サクソン系と相容れざる獨逸系米人の勢力を國中より排斥せむとする一手段だとも言はれてゐる。此の如きは一族の活躍の歴史として實に驚くべき奇蹟ではないか。古代中世近代を通じて、世界史上未だ曾て比倫を見ざる大業であつたといつても過言では無からう。そして能く之を爲し遂げた者は、強烈なる宗教的色彩を帯びた理想主義に伴へる清教徒の物質的努力と、現實主義の精神とに外ならな

つた。聖書を讀みながら労働し金儲けをしてゐる者は、昔も今も米人である。(厨川白村—印象記)

二〇 落花の雪

落花の雪にふみ迷ふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦著て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜をあかす程だにも、旅寢となれば物うきに、恩愛のちぎり淺からぬ、わが古里の妻子をば、ゆくへも知らずおもひ置き、年久しくも住みなれし、九重の帝都をば、今を限とかへりみて、思はぬ旅に出て給ふ、心のうちぞあはれなる。

憂きをばとめぬ逢阪の、關の清水に袖沾れて、末は山路を

二 復や見む交野の
み野の櫻狩、花
のゆきちる春の
曙(新古今集、
藤原俊成)
三 朝まだき嵐の山
の寒ければ、紅
葉の錦著ぬ人ぞ
なき(拾遺集、
藤原公任)

(一) 近江國蒲生郡。また蒲生野ともいふ。近江より朝立ちくれば、うねの野にたづぞなくなる。おけぬこの夜は。(古今集、讀人知らず)

(二) 白露も時雨もいたくもる山は、下葉残らず色づきにけり。(古今集、紀貫之)

うち出の濱、沖を遙に見わたせば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮き沈み、駒もとどろと踏みならず、瀬多の長橋うち渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかとおはれなり。時雨もいたくもり山の、木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、篠わくる道を過ぎゆけば、鏡の山はありとても、涙にくもりて見え分かず。物をおもへば夜のまにも、おいその森の下草に、駒を駐めてかへりみる、故郷を雲やへだつらむ。番場醒が井・柏原、不破の關屋は荒れはてて、なほもるものは秋の月、いつかわが身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏拜み、汐干にいまやなるみ瀉、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづこととほた

ふみ、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟沈み果てぬる身にしあれば、誰かあはれとゆふ暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に著きたまふ。

旅館の燈かすかにして、雞鳴曉を催せば、匹馬風にいばえて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲道を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔、西行法師が「命なりけり」と詠じつつ、再び越えし跡までも、羨しくぞ思はれける。隙ゆく駒の足はやみ、日已に亭午に上れば、餉まゐらす程とて、輿を前庭に昇きとどむ。轅を敲きて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊河と申すなり」と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎によりて、光親卿

(三) 年をへてまた越ゆべしと思ひきや、命なりけり小夜の中山。

承久三年。(一八八) 二八三—一八八)

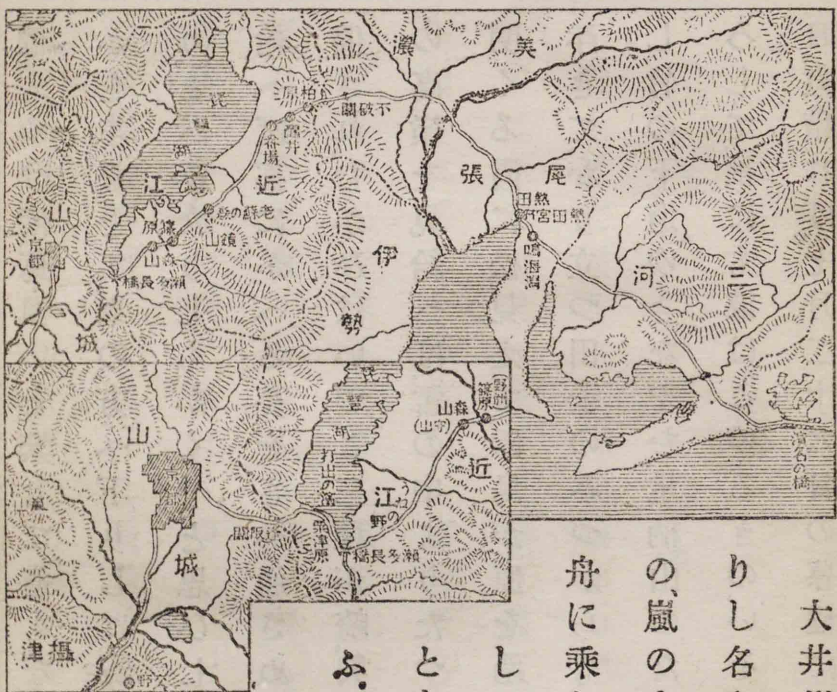
支那南陽縣の故事。上流に菊ありて、その滴り流に落ち、これを飲めば長壽を得といふ。



關東へ召し下されしが、この宿にて誅せられし時、昔南陽縣菊水、汲下流而延齡。今東海道菊河、宿西岸而終命。と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今はわが身の上になり、あはれやいとど勝りけむ、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

古もかかる例を
きく河の、同じ流に
身をや沈めむ。

山城國葛野郡嵯峨なる龜山の離宮。



大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花盛り、龍頭・鶴首の舟に乗り、詩歌・管絃の宴に侍りしことも、今は再び見ぬ夢となりぬと思ひつづけ給ふ。

島田・藤枝にかかりて、岡べの眞葛うら枯れてもののかなしき夕暮に、宇都の山べを

(一) 伊勢物語の主人
公或はその著者
なりといふ。(二)
(三) 駿河なるうつ
山へのうつつに
も、夢にも人に
あはぬなりけり。
(伊勢物語)
(四) 清見湯浦風寒き
夜な夜なは、夢
もゆるさぬ波の
關守。(新後撰集、
院大納言典侍)
(五) 富士の根の煙は
なほも立ちのぼ
る、上なきもの
は思なりけり。
新古今集、藤原
家隆

越えゆけば、蔦、楓いと繁りて道もなし。昔業平の中將の、すみ
かを求むとて、東の方へ下りしに、^(三)夢にも人にあはぬなりけ
り。と詠みたりしも、かくやと思ひしられたり。清見湯を過ぎ
給へば、都にかへる夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとど涙を
催され、むかひはいづこ三穗が崎、興津、蒲原うちすぎて、富士
の高嶺を見給へば、雪の中よりたつ煙、^(四)上なき思に比べつつ、
明くる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、潮干や淺き舟
浮きて、おり立つ田子のみづからも、うき世をめぐる車がへ
し、竹の下道ゆきなやむ、足柄山のたうげより、大磯、小磯見お
ろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐとしもはなけれども、
日數積れば、七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ著き給ひけ

れ。(太平記)

二二 會津落城上

散士は亡國の遺臣、彈雨砲煙の間に起臥し、生を孤城重圍
の中に偷み、國破れ、家壞れ、窮厄萬狀、辛酸を嘗め盡せり。屈指
回顧すれば、二十年前、我が國歐米各邦と開港條約を締盟せ
しに當つてや、尊王攘夷の説紛として起り、慷慨悲歌の士、幕
府の專横を憤り、俗吏の偷安を慨し、一死邦に報いむと、臂を
揮ひて呼號す。恨を幕府に抱くの士、亂を好んで無爲に苦し
むの徒、機に乗じて良民を煽動し、公卿を誘惑し、内に深謀遠
慮なく、外は宇内の大勢を知らず、徒に螻蛄の斧を以て歐米

の兵を攘はむと擬す。或は深夜外館を襲ひ、火を放つて剽掠し、或は白日路上不意に起つて無辜の外客を枉殺し、以て匹夫の勇に誇り、以て神州の恥を雪ぐとなす。兒戲輕佻、怯弱殘暴、言ふに忍びざるものあり。井伊大老は前に斃れ、安藤侯は後に傷き、開港を唱ふる者は人目するに秦檜を以てし、鎖國を言ふ者は自ら韓岳(三)に比す。茲に於て外人憤怒し、兵威を以て劫制し、我が海岸に寇し、我が藩籬を亂し、我が國權は彼の殺ぐ所となり、我が威力は彼の凌ぐ所となり、神州の危殆、命脈の絶えざる、一線の千鈞を懸くるが如し。外人の跋扈跳梁殆ど、復制す可からざるに至れり。而して其の原を尋ぬれば、幕府の失體より起れりと雖も、當時慷慨自ら任せし士人の

(一) 南床の奸臣、(二) 南床の忠臣、韓世忠、(一七二) 岳飛、(一七六一六) (一〇)

躬親ら招く所のもの亦多きに居る。

當時、我が主君京師を護衛し、先帝の殊遇を蒙り、佐久間象山、横井小楠諸名士の言を納れ、上、攘夷の非計を諫め、下、狂暴の輕舉を戒む。然るに内は朝臣等の攘夷論者に黨するあり、外は各國兵威を恃んで約を責むること秋霜よりも嚴なり、而して幕府は三百年承平の後を受け、政、苟且に流れ、兵勢振はず、財政紊れ、大勢已に去り、復、挽回すべからざるに至れり。この國家存亡の秋に當り、豈に毀譽成敗を顧みるに違あらむや。故に我が公、決然、京師を以て墳墓の地と定め、上は公武の軋轢を調和し、下は内亂の禍機を撲滅せむとし、奮つて之に當れり。然れども、臂弱くして負荷の重きに堪へず、且つ州

(四) 會津藩主松平容保、(五) 孝明天皇、

人勇あれども謀寡く、剛直にして變通に暗く、孤忠、公武の間に介立し、事違ひ、志空しく、徒に天下の憫笑する所となる、聞くに勝ふ可けむや。

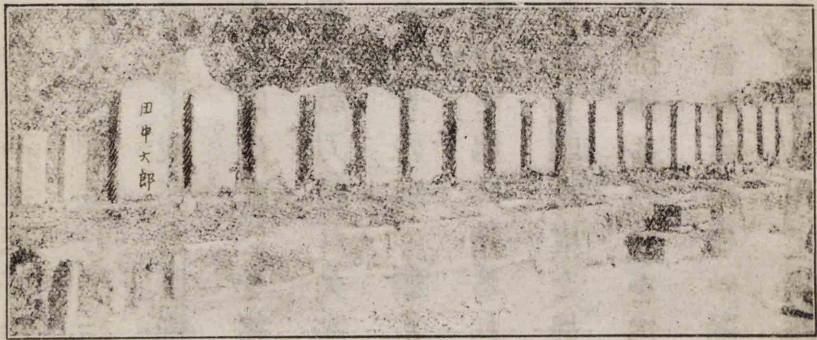
徳川十四代將軍
家茂

偶、先帝崩御し、大樹亦繼いで薨ず。將軍慶喜公、英才を以て國歩の艱難に當り、侯伯と舊怨を解き、弊政を除き、國權を復し、以て大いに爲す所あらむと欲す。然れども病膏肓に入り、復之を如何ともする能はず。遂に大政は奉還せられ、尋で我が公は職を失ひ、京師を退くに至れり。而して當時世人却て我を責むるに、覇府を保庇して維新の帝業を妨ぐるを以てし、朝廷我を罪するに、禍心を包藏して帝命に抗するを以てす。哀願途絶え、愁訴計究まり、錦旗東征、大軍我が境を壓す。

時に一二兇奸の輩あり、我が家財を掠め、我が婦女を殘し、降人を屠戮して、殆ど王師民を弔するの意を失ふが如し。茲に於て我が君臣皆以爲らく、これ一二雄藩の陽に幼主を擁して、陰に私怨を報ずるのみと。闔國捍禦、春より秋に至る。孤軍百戰、刀折れ、矢盡き、敵兵遂に城下に迫る。我が將士枕藉死するもの麻の如く、瘡者空拳を揮つて敵兵に抗し、手斷ち足碎けて地に斃るれども、目を瞋らし齒を切して敵兵の進路を遮り、頭足處を異にし、血流れて杵を漂はすに至るも、猶敵に抗するの狀を爲さざるものなし。

當時年少の一隊あり、白虎隊と云ふ。年約十六七、皆良家の子弟なり。出でて驕勝の兵と戦ひ、衆寡敵せず、死傷ほほ盡く。

馬援。後漢の光武帝に仕へて伏波將軍となる。(一七九)



白虎隊の墓

餘す所僅に十六人、敵兵に遮られて城に入る能はず、奔つて飯盛山に上り、瘡を褰み、血を歎つて憩ふ。少焉ありて、城市、火、四に起り、砲丸、檣樓を焚く。皆以爲らく、城陥り、大事去れりと。乃ち西向再拜して曰く、今や刀折れ、弦絶し、臣等が事終る。苟も生を偷んで以て君に背かず。と、相訣別し、刃を引いて自殺す。眞に憐む可きなり。然れども大丈夫尸を馬革に裹むは、伏波の壯語、亦壯士の常のみ。何ぞ之を嗟かむや。唯、酸鼻心を刺し、

目見るに忍びず、耳聞くに堪へざるものは、婦女の操烈、國家と共に亡ぶる者、擧げて數ふ可からざりしことなり。今にして其の慘狀を懷へば、茫として夢の如く、恍として幻の若く、覺えず、涙下るなり。

二二二 會津落城下

其の年八月二十二日、勝軍山の敗報到る。士民呼んで曰く、「敵軍飛來、城下に迫る。」と。時に散士三兄一弟あり。慈母、小弟を一僕に託し、涙を揮つて遠く去らしむ。蓋し深意の存するあり。大兄は軍を監して、越の後州に戦ひ、轉戦して城下に傷き、仲兄は野州に戦歿し、小兄は兵を督して境上に拒ぐ。家翁疲

明治元年、會津城の東七里に在り、要害の地なり。

兵を勵まして郭門に戦つて傷き、叔父亦客兵を督し、瘡痕を
裹みて尙激戦す。曉雨濛濛、日色光なく、砲聲轟轟、叫聲天に震
ふ。散士時になほ幼なり。一矢を敵に放つて死せむと欲し、跪
いて家人に訣別し、覺えず顔色悽愴たり。慈母叱して曰く、汝
幼なりと雖も武門の子なり。能く一敵將を斬りて、潔く尸を
戰場に暴し、家名を損すこと勿れと。散士奮つて蹶起す。家人
送つて門に至る。祖母呼んで曰く、努力せよと。乃ち涙を掩ふ。
嗚呼、痛しいかな、百年の恩情、永訣、言茲に盡きぬ。

家人神前に聚まり、香を燒き、祖先の靈に告げて曰く、事已
に茲に至る、亦言ふべきなし。苟も餘生を亂離の間に偷まじ。
潔く國家に殉じて死し、父兄をして後顧の累を絶たしめ、以

て三百年來養成せし士風を表明する、眞に此の時に存す、只
恨むらくは、我が公多年の孤忠、空しく水泡に屬し、反賊の臭
名を負ふを、是、終天の憾、海枯れ、山覆るも消し難しと。妹時に
五歳なり。慈母謂つて曰く、敵兵已に我が家に迫る。今汝と泉
下に赴き、以て父兄を待たむとす。聞く、地下途暗しと、今我が
一族皆亡ぶ、人の又香火を供するなし。汝相抱持して其の途
に迷離する勿れと。火を放つて從容義に就けり。嗚呼、悲しい
かな。

かくて孤軍益、重圍の中に陥り、硝焰空を覆うて日光なく、
風雪膚を刺して糧餉已に盡き、士卒日に傷亡して外に援兵
なく、孤城を以て天下の大軍に抗する三旬、遂を降旗を建つ。

この役や、婦女の竊に軍に従ひ死傷するもの多し。一婦あり、其の良人・父兄と皆戦歿するを聞き、手づから老母と、一子とを刃し、辭世一首を詠じて曰く、

識るや人、まもるにたへて家も身も

焼くやほのほの赤きころを。

と、火を放つて自殺す。一姫あり、一藩降ると聞き、憂憤指を噛んで壁上に血書して曰く、

君王城上建降旗。妾在深宮何得知。

と、宮前の松樹に縊る。又一婦あり、月明に乗じ、笄を以て國歌を城中の白壁に刻して曰く、

明日よりはいづくの人か眺むらむ、

なれし大城にのこる月かけ。

と、髪を薙つて死者の冥福を祈れり。士卒も憤恚自殺するものあり。

主將諭して曰く、空しく死して名を滅せむよりは、恥を忍び、生を全うして、一旦外患あるの日、誓つて神州の爲に生命を鋒鏑に委し、是非正邪を死後に定めむには若かず。と。茲に於て一藩恨を忍び涙を呑み、轅門に降る。我が公は檻車、京に送られ、將士は東西に虜となり、幽囚數歳、俗吏に罵られ、獄卒に辱しめられ、後、極北の荒野に放謫せられ、悲風蕭殺、牧馬夜嘶き、飢ゑて山下に蕨薇を掘り、窮して海濱に海藻を拾ひ、以て餘生を保てり。迺、竄斥、猶、悔いざる所以のものは、他日我

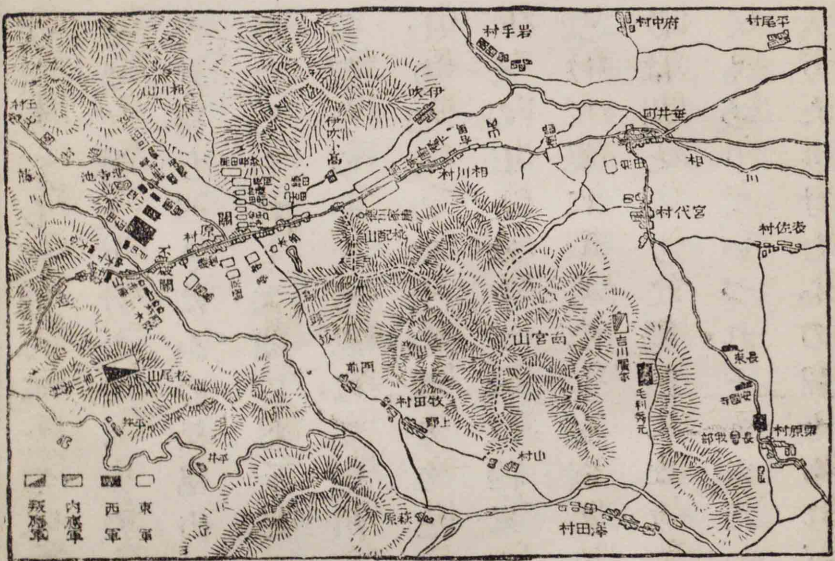
が帝國の爲に、鞠躬命を致し、往年の志を天下、後世に伸べ、死者に泉下に謝せむと欲するのみ。(柴東海散士一佳人之奇遇)

二三 關が原古戰場

藤川二に至りぬ關屋三の址は今は定かならず、右の方に松尾山、稍離れて左の方に天満山見ゆ。關が原の驛に至れば、連なれる山山、桃配・南宮山など木立深く茂れり。慶長四の昔を思ひやればいと哀なり、えも去りやらず、しばし打憩らひて、此方彼方見めぐらすに、そのかみ覺えて、何となくさしぐまるるも悲し。

石田三成五が豊臣氏の衰をいたく歎きて、關西の大名ども

一 美濃國不破郡關が原村大字松尾にある川、今は藤子川と云ふ。
二 不破の關址。
三 慶長五年(一六〇〇)



を語らひさばかり勢を振ひけむ徳川氏を討滅ほさむと思ひ立ちけむ雄雄しさよ、故太閤の御魂もあまがけりて、いかほその志を嬉しと見給ひけむ。軍の勝敗は時の運にありて、戦の罪にあらずとこそいへ、豊臣氏の衰へ行くべき時來れるは詮方なし。さりとて、はた徳川氏のこの度の軍不義なりともいふべから

小早川秀秋、夙に東軍に内應したりき。(三三三)

九月七日。

ず。居ながら關西の軍を迎へて、待ち戦ふべきにあらねば、こ
こまで討上りけむ、さるかたにいみじき智略といひつべし
ただ惡むべきは、かの松尾山にたて籠りけむ秀秋よ。己が養
ひたてられし太閤の恩を忘れ、何の恨もあらざるべきに、秀
頼親子の心をも思はで、徳川方にかたうどはしつらむこと
わり知らぬ武士の習なりとて、あまりなる心ぞかし。

その日となりて、戦は西東の兵ども皆とりどりに敵を引
受けて更に暇もなし。矢叫の音はこだまを響かし、流るる血
汐は川となりて、戦酣になりけり。或は進むもあり、或は退
くもありて、いづれとも未だわかぬものから、さばかり思ひ
入りたりけむ心の程もあればにや、ともすれば西の方進み

毛利秀元・吉川廣家等なり。廣家夙に東軍に密約して動かざりき。

さまになりぬ。よき所なりとて、三成方より烽火を打擧げけ
り。かねていひ残しし南宮山の身方に知らせつれど、更に應
ぜず。それをいかにと思ふ折しも、思ひがけぬに、かの松尾山
よりひた下りに、身方の陣に討入るものか。年月かけてたば
かりけむ心も、皆水の泡と消えはてて、東の方の勝になり
けるその有様、今も見る心地ぞする。

あはれ、討滅ほされけるつはもの心よ、佛のいふらむ妄
執ともなりぬべし。君を思ふ誠、今は空しと見なしたりけむ
三成が心、さばかりと思ひやられて、いとこそいたましけれ。
さるをこのぬしの心の程をも思ひ知らで、姦臣ぞなど、惡し
さまにいひなすらむは、いとも心うき事なり。それ徳川の世

の程こそあらめ、今誰に諛ひての論ひぞや。今日ここに來りて、思ひ出づるままに弔ひがてらとぞ。(飯田武郷一蓬室文集)

二四 羽衣

ワキ一聲ニ風早の三保の浦曲をこぐ舟の、浦人さわぐ浪路かな。サシこれは三保の松原に、白龍と申す漁夫にて候。ウ萬里の高山に雲忽に起り、一樓の明月に雨はじめて晴れたり。げにのどかなる時しもや、春のけしき松原の、浪立ちつつく朝霞、月ものこりの天の原、及びなき身のながめにも、心空なるけしきかな。歌、忘れめや山路をわけて清見湯、遙に三保の松原に、立連れいざや通はむ。五風向ふ雲のうき浪たつと見て

ワキ漁夫白龍。
ニ風早の三保の浦
ウ曲を漕ぐ舟の舟
人騒ぐ、浪立つ
らしも。(萬葉集)
三ツレ漁夫。
四萬里高山雲乍斂、
一樓明月雨始晴。
(詩人玉屑)
五風向ふ雲のうき
浪立つと見て、
釣せぬ先にかへ
る舟人、冷泉宮
相

釣せて人や歸るらむ。待てしばし春ならば、吹くものどけき朝風の、松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝なぎに、釣人多き小舟かな。ワキ詞、われ三保の松原にあがり、浦の景色をながむる所に、虚空に花ふり音楽聞え、カ靈香四方に薰ず、これただごとと思はぬ所に、これなる松に美しき衣かかれり。よりて見れば、色香妙にして常の衣にあらず。いかさまとりて歸り、古き人にもみせ、家の寶となさばやと存じ候。
シテ詞、なう、その衣はこなたのにて候。なにしにめされ候ぞ。ワキ詞、これは拾ひたる衣にて候程に、とりて歸り候よ。シテ詞、それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物にあらず。本の如くにおき給へ。ワキ詞、そもこの衣の御主とは、さては天

人にてましますかや。さもあらば末世の奇特にとどめおき、
國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。シテ詞「悲しやな、
羽衣なくては飛行の途も絶え、天上に歸らむことも協ふま
じ。さりとは返したび給へ。」

ワキ「この御詞を聞くよりも、いよいよ白龍力を得、本より
この身は心なき、天の羽衣とりかくし、協ふまじとて立ちの
けば、シテ「今はさながら天人も、はねなき鳥の如くにて、あが
らむとすれば衣なし。ワキ「地にまた住めば下界なり。シテ」と
やあらむ、かくやあらむと悲しめど、ワキ「白龍衣を返さねば、
シテ「力及ばず、ワキ「せむかたも、地「涙の露の玉鬘、かさしの花
もしをしをと、天人の五衰も、目のまへに見えて、あさましや。」

丹後風土記に見
ゆ。

シテ「天の原ふりさけみれば霞立つ、雲路まどひてゆくへ
しらずも。地「すみ馴れし空にいつしかゆく雲の、羨しきけし
きかな。迦陵嚩伽のなれなれし、聲今さらにわづかなる、雁が
ねの歸りゆく、天路を聞けばなつかしや。千鳥鷗の沖つ浪、行
くか歸るか春風の、空に吹くまでなつかしや。」

ワキ詞「いかに申し候。御姿を見たてまつれば、あまりに御痛
はしく候程に、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞「あら嬉しや、
こなたへ給はり候へ。ワキ詞「しばらく、承り及びたる天人の舞
樂、ただ今ここに奏し給はば、衣を返し申すべし。シテ詞「嬉し
や、さては天上に歸らむことを得たり。この歡に迎もさらば、
人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。ただ今

ここにて奏しつづ世のうき人に傳ふべしさりながら衣な
ぐては協ふまじ。さりとは、まづ返し給へ。ウキ詞、いや、この衣
を返しなば、舞曲をなさてそのままた、天にやあかり給ふべ



なし、ウキ、天の羽衣風に和し。シテ、雨に濕ふ花の袖、ウキ、一曲
をかたて。シテ、舞ふとかや。地、東遊の駿河舞この時やはじめ

き、シテ詞、いや、疑は人間に
あり、天に偽なきものを。
ウキ、あら、恥しや、さらば
とて、羽衣をかへし與ふ
衣、れば、シテ、少女は衣を著
しつづ、霓裳羽衣の曲を

なるらむ。

地、それ久かたのあめといつば、二神出世のいにしへ、十方
世界を定めしに、空はかぎりもなければとて、久かたの空と
は名附けたり。シテ、サシ、なかんづく、月宮殿のありさま、玉斧の
修理とこしなへにして、地、白衣、黒衣の天人の、數を三五に分
つて、一月夜夜の天少女、奉仕を定め役をなす。シテ、我も數あ
る天少女、月の桂の身をわけて、假に東のするが舞、世に傳へ
たる曲とかや。ウキ、春霞たなびきにけり、久かたの、月の桂も
花やさく。げに花桂色めくは、春のしるしかや。おもしろや、天
ならで、ここも妙なり。天津風、雲の通ひ路、吹きとぢよ、少女の
姿しはしとどまりて、この松原の春の色を三保が崎、月清見

春霧柳引きにけ
り、久方の月の
桂も花や咲くら
ん。後撰集、紀
貫之。
天津風雲の通ひ
路吹きとぢよ、
少女の姿しはし
とどめむ。(古今
集、良岑宗貞)

君が代は、天の羽衣稀にきて、撫づとも盡きぬ巖なるらむ。拾遺集、讀人知らず。

湯、富士の雪、いづれや春の曙。たぐひ浪も松風も、のどかなる浦のありさま。その上天地は、何を隔てむ玉垣の、内外の神の御すゑにて、月も曇らぬ日の本や。シテ君が代は、あまの羽衣まれに來て、地撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲そへて、かずかずの箏、笛、琴、篳篥、孤雲の外に充ち満ちて、落日の紅は、蘇命路の山を寫して、緑は浪に浮島が、拂ふ嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる。シテ南無歸命月天子、本地大勢至。地東遊の舞の曲。序の舞。シテ或は天つみ空の緑の衣。地又は春立つ霞の衣。シテ色香も妙なり、少女の裳。地「左右左、左右颯颯の花をかざしの天の羽袖、靡くも返すも舞の袖。破の舞。」東遊のかずかずに、その名も月の宮人は、三五夜中

の空に又、満願眞如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれを施し給ふさる程に時移つて、天の羽衣、浦風に棚びき棚びく、三保の松原、浮島が雲の、愛鷹山や富士の高嶺、かすかになりて、天つみ空の、霞にまぎれて失せにけり。(謠曲)

發行所

東京市神田區錦町一丁目
振替貯金口座東京四九九一番

株式會社 明治書院
電話神田二三九八番



著者 佐々政一
相續者 佐々政一
補修者 大町芳衛
補修者 武島又次郎
補修者 杉敏介
發行者 株式會社 明治書院
取締役社長 三樹一平

大正十二年八月二十日
大正十一年十一月三日
大正十一年九月二十五日
大正十一年一月十四日
校訂再版發行
校訂再版發行
校訂再版發行
校訂再版發行
校訂再版發行

訂校	定價
新撰國語讀本(全十冊)	卷一より各金六拾八錢
卷四より各金四拾錢	正時
卷五より各金五拾六錢	臨時定價
卷八より各金五拾四錢	臨時定價
卷九、十各金五拾九錢	臨時定價

訂校新撰國語讀本卷八終

Handwritten notes and calculations in the right margin, including numbers like 86, 90, 88, 80, 81, 80, 75, 91, 12, 30, 60, 48, 40, 30, 12, 24, 86, and various scribbles.

Kumamoto Municipal
Commercial
School
4 years class
1929 Grade

市商
四甲

阿部
生計